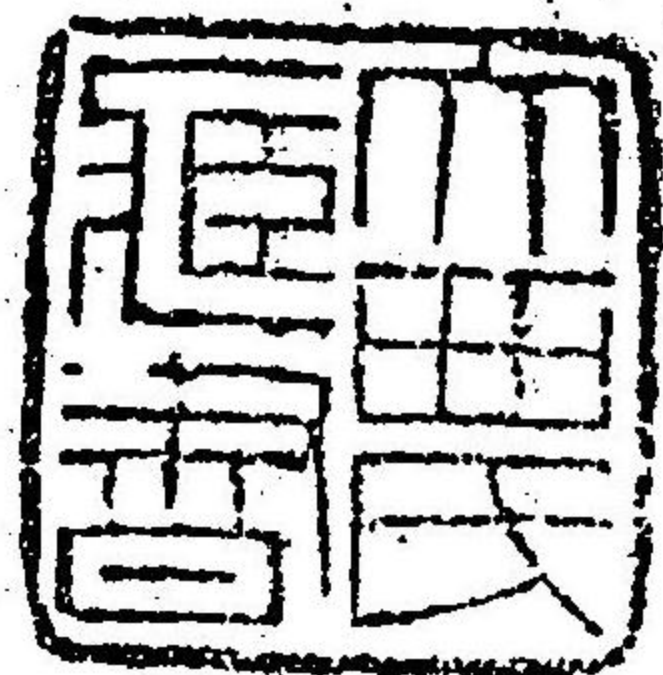


作詩天賦

森槐南題字  
井土靈山著

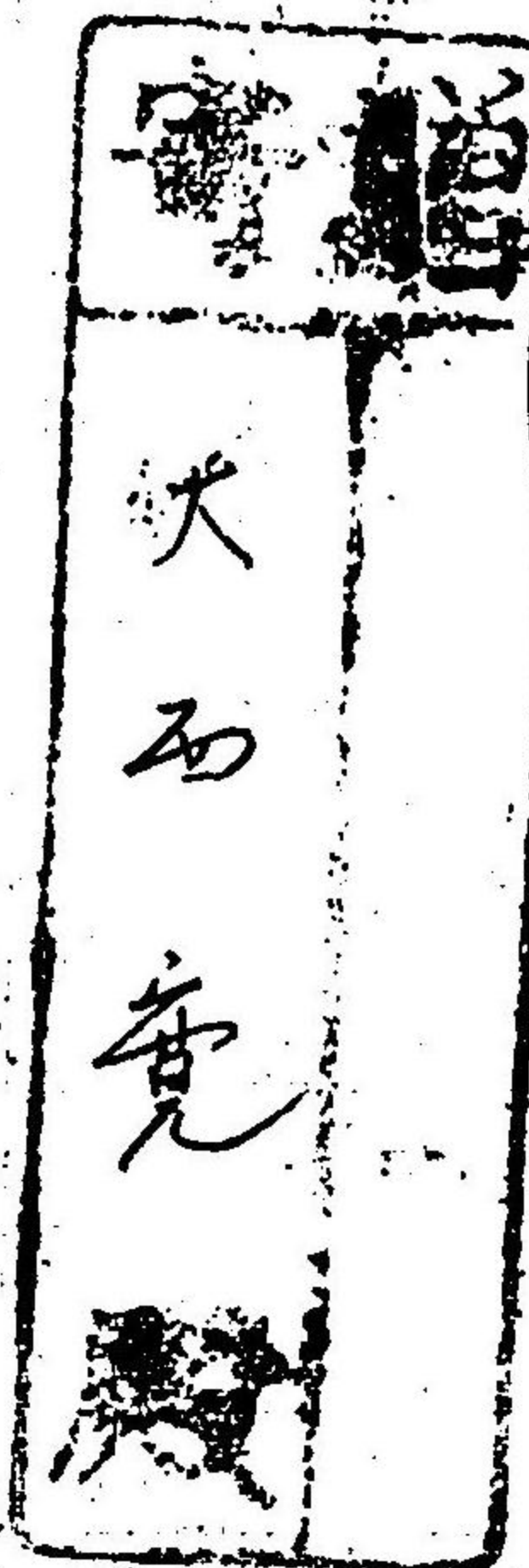
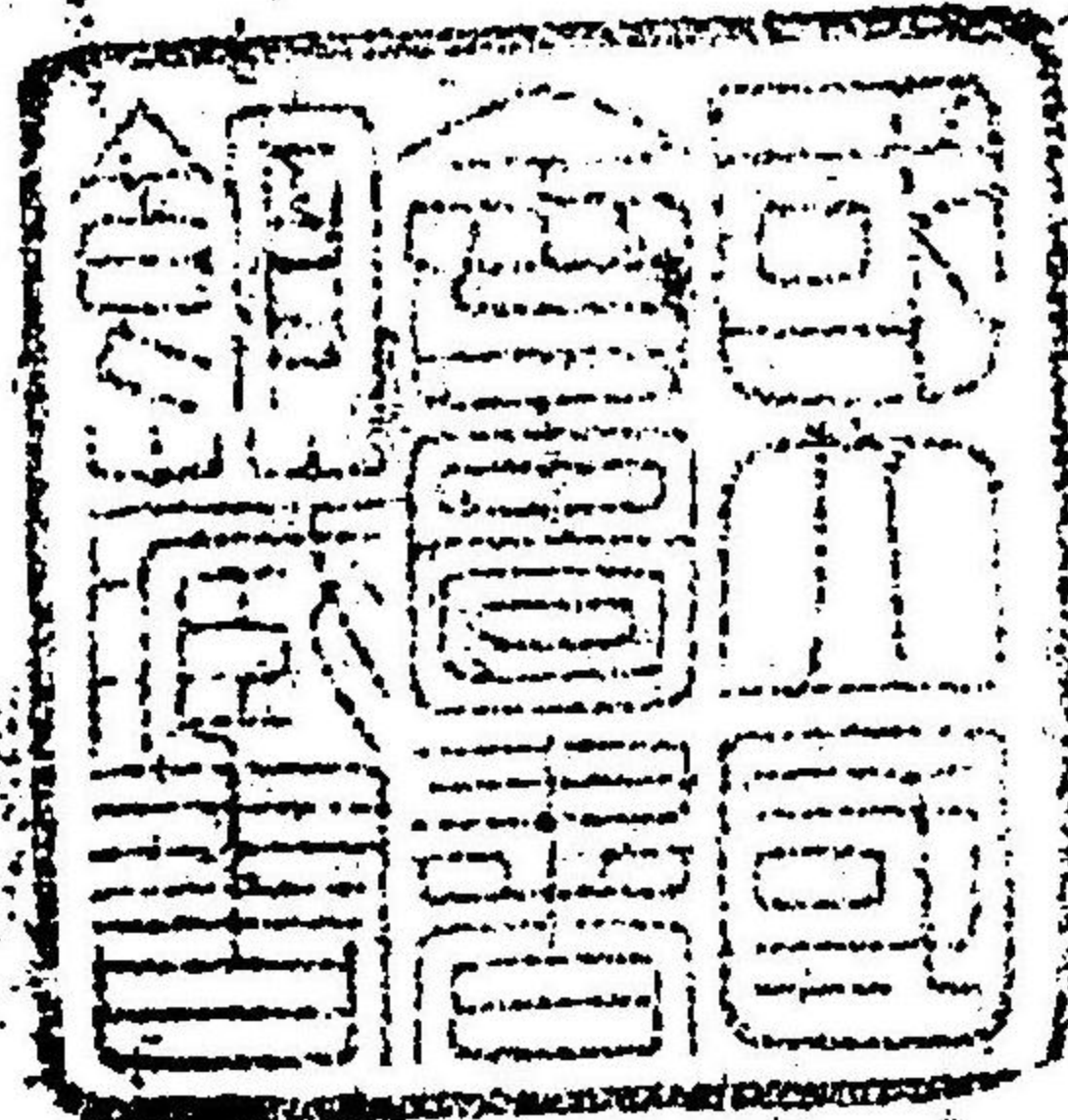


森 槐 南 先生 題 字  
土 居 國 先生 題  
井 土 靈 山 先生 著 作

# 作詩大成

東京 崇文館 發行

921  
I469A



517185



集 孔 翠

為 求 衣

庚戌歲抄

魏南大來題署



二南遺響日新  
祖述千秋有若人  
翻閱應知言志訣  
生閱應知言志訣  
生閱應知言志訣  
生閱應知言志訣

為靈山詞兄  
題作詩大成首

土居香國

詩道淵源遠。西漢何斐然。栢梁已灰滅。麗則綺繡聯。平淡含至味。豔靡徒爭妍。理趣兩相得。風格亦難捐。四傑並轡出。飄逸李謫仙。

大雅久闕焉。蘇李相唱和。唯有風流傳。典午多作者。千古無續絃。康樂登臨詠。茫茫誰比肩。李唐定天下。羣才爭翩翩。盤屈韓昌黎。

楚騷流爲賦。五言啓厥先。建安七子起。我推淵明賢。劉宋至陳隋。明遠樂府篇。宣城貴清俊。鳳翥而龍騫。沈鬱杜少陵。和平白樂天。

各從其所好。爾後一千年。規撫爲師表。  
 末流多變遷。宋詩頭巾習。理路落言詮。  
 元詩如病女。風骨纖且孱。明詩如優孟。  
 衣冠徒周旋。藝苑日蕪穢。滿目榛莽連。  
 我性素駑劣。況遭塵網牽。刪述雖有志。  
 何以能成編。兔園聊舐毫。兒戲眞自憐。  
 世運屬休明。操觚人幾千。安得揮椽筆。  
 躍鱗出深淵。

庚戌歲晚自題作詩大成

靈山外史

例言

- 言 例
- 一 本書は初學者のため、作詩の捷徑を指示す。大體古人の説く所を骨子として、參するに愚見を以てす。
  - 一 作詩の書古來世に知られたるもの汗牛充棟番ならずと雖も、浩瀚繁冗に失せざれば、淺近卑俗に流れて、簡明要を得たるもの少し。是余の謏劣を顧みず、本書を編纂したる所以なり。
  - 一 邦人音韻の學に精しからざるより、詩を作るも聲律を忽諸に付するもの多し、五言律詩の如き第二字の孤平を忌むこと、極めて知り易き例なれども、王朝時代より今日に至り、詩を以て家を成す者にして猶十中八九は知らず、本書は此點に於て最も意を用う。
  - 一 古詩平仄法は森槐南先生が漁洋の説を唱導せられてより、邦人



中聊か之を學ぶものあるも猶曠々たり。されども是亦古人の詩を精讀すれば、自ら知り得べきことなり。本書は特に其門徑を示す。一 詩法は廣し、到底此一小冊の盡す所にあらざるも、聊か初學の津梁となすを得ば、編者の望足れり。

庚戌歲晚

靈山識

目 次

次 目

序論……………一

第一章 七言絶句

(一) 平仄の式……………五

(二) 起承轉合……………九

(三) 前對格、後對格及全對格……………一五

(四) 古人の作例……………一九

(五) 實接……………二九

(六) 虚接……………三九

(七) 用事格……………四四

(八) 拗體……………五二

第二章 五言絕句

(一) 平仄の式……………五

(二) 古人の作例……………四

第三章 七言律

(一) 平仄の式及拗體……………七

(二) 對聯……………八

(三) 杜律の諸體式……………八

第四章 五言律

(一) 平仄の式及拗體……………一〇

(二) 杜律の諸體式……………一三

(三) 變體……………一六

(四) 排律……………一九

第五章 近體類語

(一) 節序……………二六

(二) 雪月花……………二九

(三) 登臨……………三二

(四) 人事……………三〇

第六章 五言古詩

(一) 一韻到底格 ..... 二五二

(二) 換韻格 ..... 三〇六

第七章 七言古詩

(一) 平仄の定式 ..... 三一九

(二) 七古作例 ..... 三三三

目次終

作詩大成

靈山 井土經重述

序論

詩といふ字の意味を調べて見るに、書經の舜典に『詩は志を言ふ』其傳に『心の之く所、これを志といふ、心之くところあれば必ず言に形はる、故に曰く、詩は志を言ふ』とあり。されば詩の古字は、言

扁に之と書き、詛又は訖を以て行はれたり。

詩經國風關雎の序には『心に在るを志となし、言に發するを詩となす』と、前漢書藝文志には『其言を誦する、之を詩と言ふ』と、鄭康成の六藝論には『詩は絃歌諷誦の聲なり』と、古來種々の註釋あ

れども、要するに心に感ずるところを言に發して、諷誦詠歎するなり。我邦にては詩を『カラウタ』と訓ずれども、歌も詩も其意に於て大差なし。

支那にては詩を以て六經の一となせり、六經とは詩、書、禮、樂、易、春秋なるが、此詩と云ふは、周の盛時、諸國に於て諷誦せられしもの、中より、孔子が三百餘篇を採りて、刪定を加へしもの、即ち詩經の一書なり。後世詩を談ずるものは、先づ之を以て詩の本源となせども、周以前にも諷詠せられたるもの多し。

要するに心に感ずるところを諷誦詠歎することは、人類自然の通則にして、如何なる野蠻國といへども、歌謠のなきものなし。古今集の序にも『枝に啼く鶯、水に住む蛙、何れか歌をよまざるべき』と云ひしも此理なり。

支那の歴史に見はれたる最も古き歌謠は、堯の時の擊壤歌、康衢謠等なり。次で夏、殷、周三代を経て、戰國の末に至れば、楚人の文學大に行はれて、諸國皆其感化を受く、所謂先秦の文學は大抵楚の産物なり。就中屈原、宋玉の一派最も盛にして、其言太だ長し。詩變じて賦となりしは之がためなり。漢に入りて、樂章を作り絃歌せしもの多く、後世樂府の起源は此に在り。而して其音節は多く四字を以て句となすこと、古來の通則なり。稀には三字、五字乃至七字を以て句となすものあれども、今字を加へて節奏を調へ、後世の五七言の句とは全く異なれり。七言の詩は武帝の栢梁體に掬まり、五言は李陵、蘇武の唱和を權輿とすと云へども、卓文君の白頭吟は蘇李に先ちて純然たる五言の詩なり。

次で魏晉南北朝を通じて、隋に至るまで、七言は多く行はれず、詩

と云へば大概五言に定まれるもの、如く、唐に至りて始めて五七言並び盛なり。而も句數に定まりなし、且一定の聲律もなかりしもの、沈約の説によりて、今の所謂絶句、律體を生じたり。故に詩の歴史は隋唐の間に、一大鴻溝を劃して、古今の兩體を分つこととなりしなり。

古體とは即ち隋以前の體に擬して作るものにて、章句に長短ありて、聲律に定式無し。近體は四句（絶）若くは八句（律）にして一定の聲律を要す。是古今沿革の大要なり。而して今詩を學ばんと欲せば、先づ近體の絶句より入手するを可となす。

第一章 七言絶句

(一) 平仄の式

七言絶句は四句、二十八字より成る。絶は截にて、律詩の半截といふ義なり。

詩は古に於て凡て絃歌諷誦に資すべきものなりしが、漢代に樂府の一體ありて、専ら之を絃歌の用に供し、一般の詩はたゞ學者の志を述る具となれり、然れども七言絶句のみは、唐代に至りて、猶妓流の諷誦せるもの多し、離別の席に於て、陽關三疊の曲を歌ふなど、我邦の都々逸、端唄の如く、歌曲として持囃されしが、それも後には變じて填詞即ち詞曲となれり。是れ詩詞の區別ある所以と知るべし。





詩の生命の繋るところ全く此に在り。我邦の端唄の例を以て之を云へば、

(起句) 羽織かくして袖引止めて、

(承句) どうでも今日は行かんすかと、

(轉句) 障子細目に引あけて、

(結句) あれ見やしやんせ此雪に、

の起承二句は、男を引止むることを述べ、意味相連接して、離るべからざるものなれども、轉句に至りて、障子を細目に引あくるは何の意味やら、起承と對照して、全く別意なるが如く、解釋に苦めども、結句を讀むに至り、始めて其意のあるところを了解し得べし。

涼州詞

葡萄美酒夜光盃

欲飲琵琶馬上催

王翰

醉臥沙場君莫笑

古來征戰幾人回

此詩の起承二句は、玉盃に美酒を盛りて飲まんとすれば、胡人馬上に琵琶を弾じて興を添ふと、陣中の光景を述べ、轉句に至りて、沙場に醉臥するを笑ふなかれと云ふ、結句を讀まざれば、何の意か解し難し、乃ち古來征伐に赴きし將士は、大抵白骨を沙場に曝して、生還するを得ざれば、我等と雖も亦然らん、故に酒なりとも十分に飲みて、生前の歡樂を盡すべし、今夜の中にも、敵軍襲來して潔く戦死せば、再び酒も飲む能はず、暫時醉倒するも其狂態を笑ふなかれとの意にて、轉結二句によりて無限の感慨を見るべし。絶句は總て此調子にて作るべきなり。

題不識庵擊機山圖

鞭聲肅肅夜過河

曉見千兵擁大牙

賴山陽



遺恨十年磨一劍

流星光底逸長蛇

此詩も起承二句は、謙信が夜半軍を警めて、西條山を發し、曉天河中島へ向ひ、信玄の本陣に迫れる光景を述べ、轉句は十年一劍を磨して何のために遺恨なりしや、結句を讀まざれば其意を知るに苦しむ。小豆長光の大刀を揮ふて、電光一閃の下に、信玄を兩斷となさざりしが終生の遺憾とするところにして、遺恨の字此に於て萬鈞を引くの力あり。

之を要するに、起承は一意を以て成り、轉結又一意を以て成り、而して結句は起承二句の意を收束せざるべからず。

此法は獨り詩のみならず、平生の談話の上にも自然具備すべきものなり。之を具備せざれば、人をして傾聽せしむるの力なし。人に對して金を借らんと欲せば、先づ金を借ることを云ふ、是發端の辭とし

て、起句なり。次に其理由を敍べて發端の辭を確實ならしめざるべからず。次に別に其人の心を動かすべき意外の事を述べて、而して最後に成程と合點せしむるを要す。詩人は常に貧乏なるゆる斯る例を引くと云ふ譯にあらず、總ての談話或は文章皆起承轉合あり。文章に於ける抑揚頓挫は詩の轉句と其理同じ。活變の妙は此にあり。而して結句は起承二句と相呼應して收束を爲す、是れ文章の照應なり。

越中懷古

李 白

越王勾踐破吳歸  
宮女如花滿春殿

義士還家盡錦衣  
只今惟有鷓鴣飛

此詩を説くもの、前三句を以て一意となす。蓋し三句を連ねて、古を述べ、唯結句のみ、今の寂寥を悲むものなれば、斯く解釋するも可なれども、能く玩味すれば、前三句一意と雖も、層々次第ありて

同じからず。越王勾踐が臥薪嘗膽の苦を忍びて、遂に宿世の敵國たる吳を亡ぼして凱旋し、其功臣は何れも論功行賞の結果、錦衣を着けて、得意なりと云ふは、起承の意味にして、轉句は花の如き宮女が春殿に満つと、越王勾踐心驕り意満ちて、美人を聚め、遊宴に耽るさまを言ひ、前の臥薪嘗膽、戰に勝つとは全く反對の意を示す。さればこそ遂には國亡びて今は唯鷓鴣の啼くあるのみ、錦衣の義士も、花の如き宮女も春殿も無く、人をして憑吊の涙を灑がしむとなり。即ち艱難を以て成り、驕奢を以て敗るの意を寫したるものにて、轉句の宮女春殿は非常の力あるなり。若し之を三句一意とのみ解するときは、何等の妙味無し。

題 書  
千 秋 霸 業 說 豐 公

公 亦 微 時 是 牧 童  
森 春 濤

煙 雨 滿 村 春 靨 豔  
可 無 牛 背 出 英 雄  
此詩は轉句無しと雖も、意は即ち通ず。然れども煙雨滿村の文字なくんば、詩として何の趣味も無し。故に此一句ありて、始めて詩と云ふを得べき大切の文字なり。

(三) 前對格後對格及全對格

前對格とは起承二句を對句とするなり。青山に對する白水、白雲に對する明月の如き、之を對句と云ふ。

山 店 盧 綸  
登 登 山 路 何 時 盡  
風 動 葉 聲 山 犬 吠  
決 決 溪 泉 到 處 聞  
一 家 松 火 隔 秋 雲

これ即ち前對格にして、登々たる山路と決々たる溪泉、何時と到處、

盡と聞と字々相對す。起句の平仄、轉句の如くにして且押落フミオトシと稱し韻を押まざるは前對格の正則なり、或ひは押落フミオトシならざるもあり。

舟 行  
蕭 蕭 落 葉 送 殘 秋  
今 夜 不 知 何 處 泊  
斷 猿 晴 月 引 孤 舟  
寂 寂 寒 波 急 暝 流

此詩の如きは前對格にして、起句も韻を押めり。後對格は轉結二句を對にするものにて、

寒食汜上作

廣 武 城 邊 逢 暮 春  
落 花 寂 寂 啼 山 鳥  
汝 陽 歸 客 淚 沾 巾  
楊 柳 青 青 渡 水 人

の如きは是なり。斯く對語を以て結ぶを對結と稱す。後對格は前對格に比すれば、一層作り難きものなり。何となれば對句を以て、意を

轉じ且つ收束をなさざるべからざればなり、若し漫然として對語を下せば、遂に一篇の意を結ぶ能はざるべし。

四句全對格は、起承及び轉結共に對句を以て作るなり。

同武平一遊湖

朦 朧 竹 影 蔽 巖 扉  
舟 尋 綠 水 宵 將 半  
淡 蕩 荷 風 飄 舞 衣  
月 隱 青 林 人 未 歸

儲光義

起承は竹影と荷風とを對して、良夜の景を叙べ、轉結は舟遊の興に乗じて、人の歸る遲きを云ひ、對結甚だ巧みなり。

絶 句  
兩 个 黃 鸝 鳴 翠 柳  
一 行 白 鷺 上 青 天  
牕 含 西 嶺 千 秋 雪  
門 泊 東 吳 萬 里 船

前詩は全對格にして起句に押韻あれども、此詩は押落なり。一讀せ

しところ、漫然所見を述べたるが如く、起承轉結の位置に意を注がざるが如くなれども、是杜甫が久しく蜀の成都嚴武の幕下にありて、東吳に遊ばんと欲する意あるときの作にして、黃鸝の翠柳に鳴くは、身の一所に淹滞せるに比して歎ずるなり、白鷺の青天に上るは、其飛翔自在を羨み、遠遊の意を示すなり。西嶺は、蜀の名山峨眉にして、山上の積雪消るときなきは、戰亂相續で、寇賊の滅びざるに比し、亂世のため道途梗塞して、遊意の果し難きを慨し、而して門前には蜀より東吳に往來する船あるを、空しく望見するのみと、無限の感想を述べて、一篇の收束となす。全對格の詩も此の如く、用意周到なれば可なり。徒らに對語を排列するのみにては、何の價值もなかるべし。

(四) 古人の作例

七言の句は、二字二字三字と重疊して作るを通則となす、例へは月落<sup>(三)</sup>鳥啼<sup>(三)</sup>霜滿<sup>(三)</sup>天<sup>(三)</sup>の如し。或ひは多少の變化あるも、圓熟巧妙を極めざれば、誦し難きものとならん。

用語は陳腐を嫌ふと雖も、人の目に慣れざる生硬の熟字も亦不可なり。青山、白水、黄金、白髮の如きは數千年來用ゐる語なれども、用法の如何によりて、斬新なるものとなるべし。

同じく『あをし』といふ字にても、青蒼碧等皆其用法を異にす。青苔は生氣を含みて清らかなる苔なれども、蒼苔は老いて荒れたる墓などの物淋しきさまを形容するに用う。

紅涙は兒女の涙に用うべきも、男子には不可なり。赤心、丹心はあ

かき心、まごゝろの義に用うれども、紅心とは使ふべからず。山中の景色には白雲明月を用うべきも、水上の景色は碧雲明月を可とす。此の如きは古來慣用の熟字にて、之を濫用すれば詩にならざるなり。

獨り詩のみにあらず、日常の談話、文章の上にてても、古來の慣用を破りて、誤まりたる語を使へば、他人の解し難きもの多かるべし。されば物徂徠も詩文を以て、小子輩修辭の資となすと云はれたれど、無用の小枝とは云へ、詩を學ぶは、熟語の用法を練習するに於て最も必要のことなり。

夕陽、斜陽はあれども、暮陽晚陽とは云ふべからず。而して晚暉、斜暉、夕暉は用う。啼鳥といふ熟字あれども、鳴鳥は俗にして用うべからず。故に鳥啼花落を鳥鳴花落とは用ゐ難し。人民と云ふは多

くの場合に於て使はるゝも、社稷人民と云ふべきを、社稷人民と云へば俗に聞ゆ。これらの例は文字の道理上より定まれるものにあらずして、全く慣習の上より自然に馴致せられしものなり。詩を學ぶは先づ第一に熟語の用法を知ること肝要にして、其結果は文章の上にも、談話の上にも非常の影響を及ぼすべし。支那文學を修めんと欲するに、詩を以て階梯とすること亦宜ならずや。

李白の越中懷古に、越王勾踐破吳歸と起し、義士還家盡錦衣と承け、宮女如花滿春殿と轉じてあるが、其用語の穩貼にして、精彩あるは最も後人の規矩とすべきものなり。先づ越王勾踐と特筆大書したるは、正々堂々として莊重犯すべからざる威容を示し、軍勝つて勢盛んなる光景宛然目にあり。義士の字に就て或は曰く戰士の誤ならんと、然れども戰士にては意味無し。越王と臥薪嘗膽の苦を共にして、

遂に國讐を滅したる忠義を表彰するため義士の字を用ゐしものと解して、此詩の妙を語るべきなり。還家盡錦衣は、勳功によりて富貴の身となりしことを述べしものにて、君臣の義に依りて戦に勝ち國を興したるを稱揚せり。然れども錦衣の字に早くも驕奢の兆あるを示し、轉句は宮女花の如く春殿に満ちて、越王が志満ちて聲色に耽り、亡國の素因を爲すことを慨せり。春殿の春は無用の如くなれども、花の字と相襯して、其遊宴の盛を形容するに最も力ある文字なり。文字の用法は斯るところに注意すること肝要なるべし。故に此三句は、越王の論贊とも稱すべき大史筆にして、僅々二十一字の中、越王の堅忍不拔と、其臣の忠義とを歎美するに始まり、驕奢を以て國家を失ふに終り、春秋の筆法を以て、後の人君を警戒するの深意を寓せり。而して只今惟有「鷓鴣飛」の一句を以て結ぶところ、最も

沈痛を極めたり。

名詞のみを用ゐて句を作れば、雄健なりと雖も、堆疊の弊に陥り易し。例へば水村山郭酒旗風。銀鞍白馬羽林郎の如し。數句の中、一句は之を用ゐる得るも、二句以上を連ねて名詞のみを用ゐるは困難なり。因て働詞を運用せざるべからず。綠樹重陰蓋四隣。山頭水色薄籠煙。の蓋、籠二字の如きは是なり。詩の巧拙は多く此働詞の運用如何によりて判せらる、故に古人も之を字眼と稱して、最も工夫を練ることとせり。

詩に助字を多く用うれば句勢自ら弱くなり易し。唐詩の雄健にして、宋詩の纖弱なるは、助字の多少其一因たり。然れども用語の操縦上、之を棄つれば堆疊窒塞して、活動の餘地無し。但し之を用うるとき、十分其意を明かにして、十分の力あらしむべきなり。

助字の力あるものは、大抵兩三句若くは全篇に涉りて、活動せるものなり。

初入諫司喜家室至  
一旦悲歡見孟光  
不知筆硯緣封事

十年辛苦伴滄浪  
猶問備書日幾行

これは竇群が久しく江湖に飄泊したる後、拾遺即ち天子の左右に在りて、諫争する職に擧げられて、辛苦を共にせし妻の來り伴ふを喜びて賦せるなり。一旦の悲歡は、昔の辛苦と、今の榮華と、今昔の感に堪へず、悲歡交も至りしなり。筆硯封事に緣るは、天子を諫むる上書を草するなり。されども妻は猶昔の備書して賃錢を得、米鹽の料に充てたる時代を忘れず。日に幾行づ、書き得るやと問ひたりとの意なるが、不知と猶問と此二虚字は相關聯して、此一篇の詩

を成せり。若し此二虚字を除けば、全く何の意味もなきものとならん。

秦淮  
煙籠寒水月籠紗  
商女不知亡國恨

杜牧  
夜泊秦淮近酒家  
隔江猶唱後庭花

これも不知、猶唱の二虚字によりて、組織せられしものなり。秦淮は今の南京即ち金陵に近き狹斜の地にして、古來酒家妓樓多し。金陵は亦宋齊梁陳歴代の帝都にして、陳の後主驕奢淫逸を事とし、玉樹後庭花の曲を作り、宮人に歌はしめしが、一朝國亡ぶるも猶之を唱ふるものあり。此詩秦淮に宿すれば、煙月の景、佳なりと雖も、帝王興亡の跡を弔すれば、感慨の涙禁する能はず、然るに妓女は亡國の恨も知らずして、陳の後主の後庭花を唱ふるは、猶一層のあは

れを添ふとなり。若し不知、猶の字を用ゐざれば、此好詩は得難し。

寫情  
水○紋○珍○篋○思○悠○悠○  
從○此○無○心○愛○良○夜○

李益  
千○里○佳○期○一○夕○休○  
任○他○明○月○下○西○樓○

此詩は愛する所の婦人に別れたる恨を述べたるなり。水紋の珍篋は、波紋の涼しげなる竹席にて、夏夜月下之を敷き、愛婦と共に樂みしものが、今夜よりは獨寐の淋しく、良夜の明月を愛する心もなく、西に傾き落つるもまよよと、すてばちの氣味なり。而し從此、任他の虚字によりて十分に其意を云ひ現はせり。任他はサモアラバアレと訓じ、俗のマ、ヨ、勝手にせいと云ふ事なり。一任、遮莫など書するも皆同じ。此李益と云ふ人は、非常に嫉妬深き性質にて、妻妾の許に通ひ來る情人などありはせぬかと、毎夜戸側に灰を散じて、

其足迹を檢せしと傳へられたり。されば婦人に對する情も一層強く、斯る詩を作りしものならん。

虚字の用法は、實に大切なるものにて、濫りに用うべきものにあらず。古人の詩を讀む毎に、能く精思すれば自ら其法を悟るべし。一句の中に對語を用うるときは、器用らしく見ゆるものなり。されども前後の關係に注意せざれば、特に一句獨立せるものとならん。例へば

緣○君○莫○話○封○侯○事○  
一○將○功○成○萬○骨○枯○

の一將と萬骨と相對して巧みなり。然し前に封侯の事を話すことなかれと云ふに接觸して益々巧を見る。又一句中に字を疊むものあり。

水○自○潺○湲○日○自○斜○  
煙○籠○寒○水○月○籠○紗○  
杜○牧○



獨<sup>○</sup>在<sup>○</sup>異<sup>○</sup>鄉<sup>○</sup>爲<sup>○</sup>異<sup>○</sup>客<sup>○</sup>王維  
 閑<sup>○</sup>愛<sup>○</sup>孤<sup>○</sup>雲<sup>○</sup>靜<sup>○</sup>愛<sup>○</sup>僧<sup>○</sup>杜牧  
 得<sup>○</sup>寵<sup>○</sup>憂<sup>○</sup>移<sup>○</sup>失<sup>○</sup>寵<sup>○</sup>愁<sup>○</sup>李商隱  
 不<sup>○</sup>問<sup>○</sup>蒼<sup>○</sup>生<sup>○</sup>問<sup>○</sup>鬼<sup>○</sup>神<sup>○</sup>李商隱

これも多きに失すれば、巧を弄して却つて拙に陥ることあり。  
 二句にして分割すべからざるものあり、

長信秋詞

王昌齡

奉<sup>○</sup>帝<sup>○</sup>平<sup>○</sup>明<sup>○</sup>金<sup>○</sup>殿<sup>○</sup>開<sup>○</sup>  
 玉<sup>○</sup>顏<sup>○</sup>不<sup>○</sup>及<sup>○</sup>寒<sup>○</sup>鴉<sup>○</sup>色<sup>○</sup>

且<sup>○</sup>將<sup>○</sup>團<sup>○</sup>扇<sup>○</sup>共<sup>○</sup>徘徊<sup>○</sup>  
 猶<sup>○</sup>帶<sup>○</sup>昭<sup>○</sup>陽<sup>○</sup>日<sup>○</sup>影<sup>○</sup>來<sup>○</sup>

此詩の轉結二句は、玉顔は寒鴉が昭陽の日影を帶ふるに及ばずの意にて、我邦の訓點を施して之を讀むときは、以て其一意にして分割すべからざるを知るべし。長信は漢の宮殿の名にて、班婕妤寵を趙飛燕に奪はれ、幽居せしところなり。奉帝は宮中洒掃の任に當らんと意にて、婕妤の謙辭なり、婕妤又團扇の秋に至りて棄てらるゝ

を詠じて、君恩の衰へしを歎く、起承二句共に婕妤の故事を用う。題名に對して用語の苟もせざるを見るべし。飛燕の妹亦昭儀となりて、成帝の寵を専らにし、昭陽舍に居る。故に婕妤自ら昭陽の餘恩寒鴉にまで及べるを羨むことを詠せしなり。此詩の如きは、轉結我邦の讀法によりて、分割すべからざるを知ると雖も、然らざるも轉結は多く一意にして、分割すべからざるを可となす。  
 其他言ふべきこと多きも、他の各項の下に分説すべし。

(五) 實 接

實接、虚接は周弼の説に基くなり。其言に曰く、絶句の法は、大抵第三句を以て主となし、首尾率直にして婉曲なきもの、これ異時の唐に及ばざる所以なり、實事を以て意を寓し接すれば、轉換力あり、

斷るが如くにして續ぎ、外振起して内平妥を夫はず、前後相應ず、四句に止るといへども、而も不盡の意を涵蓄すと、要するに轉句を以て主要となし、實事を以て起承二句に接續するを實接と云ふ。實事とは何ぞ、現在の事實なり。其例を左に擧ぐ。

宮 詞  
金 殿 當 頭 紫 閣 重  
太 平 天 子 朝 元 日

王 建  
仙 人 掌 上 玉 芙 蓉  
五 色 雲 車 駕 六 龍

宮詞は宮中の事を詠するなり。王建は唐の大曆十年の進士にして、宦者王守澄の族弟たり。故に禁掖の故事を知ること多く、宮詞百篇を作る、是其一なり。金殿當頭紫閣重は、宮殿の上に高く天に聳えて、神仙を祭る壇を設けたるなり。仙人掌上玉芙蓉は、天上の露を取り、玉屑と稱する一種の藥に和して飲めば、不老長生を得べしと

て、其露を承くるために作る。漢の武帝と承露盤といふも是なり。其臺を稱して仙人掌と云ひ、上に玉盃を安んず、玉芙蓉は即ら是なり。朝元は元旦にして、其日は天子百官の賀を受けて、最も禮義を正すべき筈なるに、神仙荒誕の説に惑はされて、五色の雲車に駕し、何の用を成さんと諷刺の詩なり。五色の雲車は五彩を以て雲の形を畫ける車にして、神仙を祭る時に用ふ。六龍は六馬にして、天子の乗輿は六馬に駕す。詩意、漢の甘泉宮の事を借り、天子禮に違ひ怪を好むを譏るなり。禮に奇器は宮に入れず、君は奇車に乗らずと、況んや非禮の器を作り、非常の服食を爲し、以て不死を求め、鬼神の車服に御し、以て淫祀を事とするをや。太平の天子と云へるは所謂反語にして、其實惑ふて悟らざるを諷す。其字面は典雅にして婉曲、是詩の妙なり。一言の議論を着けずして、千言萬語の論奏に勝

成 大 詩 作

るもの、全く實事を用うるの巧みなるにあり。周弼が實接の典範として之れを取る、亦宜ならずや。

自<sup>○</sup>是<sup>○</sup>三<sup>○</sup>千<sup>○</sup>第<sup>○</sup>一<sup>○</sup>名<sup>○</sup>  
芙<sup>○</sup>蓉<sup>○</sup>殿<sup>○</sup>上<sup>○</sup>中<sup>○</sup>元<sup>○</sup>日<sup>○</sup>

内<sup>○</sup>家<sup>○</sup>叢<sup>○</sup>裡<sup>○</sup>獨<sup>○</sup>分<sup>○</sup>明<sup>○</sup>  
水<sup>○</sup>拍<sup>○</sup>銀<sup>○</sup>盤<sup>○</sup>弄<sup>○</sup>化<sup>○</sup>生<sup>○</sup>

此詩、芙蓉殿上中元日の句、前首の太平天子朝元日と句法、意味殆んど相同じく、實事を以て起承に接したるものなり。詩意は、宮女三千の中にて第一と稱せられし美人が、中元の日に當り、他の宮女は何れも、宮中式禮のため天子の御宴に侍して、歌舞を奏するに、一人閑靜なる別殿に取殘されて、無事に苦む餘り、盤中の水に化生即ち人形を弄ぶと、恩寵無き宮女の薄命を賦せしなり。化生は七夕星祭りの時、蠟を以て嬰兒の形を作り、水中に浮べて、産兒にうぶ湯

句 絶 言 七 章 一 第

を道はせる戯れを爲す、此事本西域より出で、摩喉羅と稱す。今七夕に弄ぶべきものを、中元に之を用う。益々以て其無聊を知るべきなり。内家は教坊の妓院内に在るものにして、獨分明は特に目立ちて嬌艶なるを云ふ。題の吳姬は、吳は美人を多く出すを以て、單に美人と云ふに同じ。蓋し宮女を借りて、士の才能を負ふて、不遇に終るを歎ずるなり。宮中第一の美人にして、天子の寵を受けず、徒らに人形を弄びて妙齡を過すは、士の大才を抱きて、朝廷に知られず、詩文の如き雕蟲の末技を事として、生涯無名の人となるに同じ。是亦一字の議論無くして、無限の感慨を寓し、而も文字の綺麗愛すべし。芙蓉殿は曲江の上において、天子宫女と遊宴を爲すところなり。

江南逢李龜年

杜 甫

岐○王○宅○裏○尋○常○見○  
正○是○江○南○好○風○景○

崔○九○堂○前○幾○度○聞○  
落○花○時○節○又○逢○君○

此詩は前對格なり。岐王は唐の宗室にして崔九は顯貴の地位に在りし人なり。而して李龜年は玄宗帝の恩寵を蒙りし有名の伶人にて、岐王の邸にも屢々召されて、杜甫も平生相知り、崔九の邸に於ても、度々其奏樂を聞きしが、安祿山の亂に天子蒙塵して、蜀に幸し、宗室貴戚も流離落魄、況んや伶人の如きをや。僅に身を以て都を落延び、天涯に漂泊せし末、今日此江南に於て偶然邂逅するも、昔日の事を思へば、悲痛感慨限りなし。江南の山水は勝景多く、時節は春に屬して、最も賞すべきなれども、却つて斷腸の種となる、況んや此落花紛々人の心を傷ましむるをやと、悲涼悽慘の意を寓して、一涙字を着けざるは實に高手と云ふべし。起承二句は過去を叙し、之

に接するに正是江南好風景と、目前の實景を以てす、亦實接の法なり。

贈○彈○箏○人○  
天○寶○年○中○事○玉○皇○  
鈿○蟬○金○雁○皆○零○落○

温○庭○筠○  
會○將○新○曲○教○寧○王○  
一○曲○伊○州○淚○萬○行○

天寶は玄宗盛時の年號なり。玉皇は玄宗の事なり。寧王は玄宗の兄なり。此箏を彈する人亦前首の李龜年の如く、玄宗の朝に事へし伶人にて、其盛時には斯曲を以て寧王に教へしこともありしが、安祿山の亂にて、民間に流落し、樂器の如きも悉く散失し、多くの曲を彈する能はず、纔かに伊州の一曲を彈するのみなるが、之を聽きて、昔日の事を追想すれば、感涙萬行禁すべからずとなり。鈿彈は箏の裝飾にして金雁は箏柱、伊州は天寶中、西戎より都に傳へられし歌

曲の名なり。此詩前首杜市の作と意匠殆同じと雖も、自然の妙は杜に及ばざること遠し。而も文字の上に工夫を費せし痕迹見えたり。詩格の高下を知らんと欲せば、此等の作を比較して研究すべし。

鄴宮  
花飛蝶駭不<sub>レ</sub>愁<sub>レ</sub>人  
曉日靚粧千騎女

陸龜蒙  
水殿雲廊別置<sub>レ</sub>春  
白櫻桃下紫綸巾

鄴宮は魏の曹操の都を建てし所にて、晉五胡の亂に、石氏、慕容氏、高氏相繼ぎて此に居り、就中石季龍の驕奢、常に女騎千人を以て鹵簿となし、悉く紫綸巾、熟錦袴を着けしむ。此詩之を詠せしなり。詩意、花は飛び蝶は駭きて、春色既に盡くと雖も、人をして愁へしめず。何となれば水に接し雲に連りたる輪奐宏壯なる宮殿の中には、別に一種の春色を貯へ置けばなり。さて其春色とは何ぞや、曉日に

盛粧せる千騎の美人隊が、紫綸巾を冠して白櫻桃の花の下に整列せるは、目もさびるばかり美しく、千紅萬紫の芳艷を競ふに似たりとなり。櫻桃は初夏に花を開き、白色のもの其一種なり。曉日靚粧の句、即ち實事を以て起承に接せり。

上陽宮  
愁雲漠漠草離離  
薄暮毀垣春雨裏

竇處處  
太掖勾陳處處疑  
殘花猶發萬年枝

上陽宮は洛陽即ち今の河南府にありて、唐に東都と稱し、則天武后一時此に居れり。太掖は宮中の池、勾陳は天子の殿前なり。詩意、昔天子后妃の住はれし上陽宮も、今は荒れ果て、愁雲漠々、亂草離々、何處が太掖やら、何處が勾陳やら、更に辨別し難く、日暮蕭々たる春雨の降り灑ぐ破垣の中に、冬青の花の淋しげに咲けるが、

纔かに昔の俤を殘すのみなりと、極めて荒涼の光景を寫し、言外に無限の悲みを寓せり。萬年枝は冬青樹にして、多くは宮中陵墓に植う。

過<sub>三</sub>綺袖宮<sub>一</sub>  
玉樓傾側粉墻空  
武帝去來紅袖盡

重疊青山遶<sub>三</sub>故宮<sub>一</sub>  
王<sub>建</sub>  
野花黃蝶領<sub>三</sub>春風<sub>一</sub>

綺袖宮は東都永寧縣の西にあり、玄宗の建る所なり。此詩亦前首と同じく専ら目前の荒涼たる光景を寫して、中に懷舊の情を寓す。玉樓は傾き粉墻は空しく、唯青山舊に依りて重疊、荒れ果てたる宮殿を圍み、玄宗帝の此世を去り給ひし以來、數多の宮女も悉く離散して、舊影を留めず。獨り黃蝶の野花に戯れて、得意氣に春風を領するのみと、目前の實景を寫して、悲涼限りなし。黃蝶は多く秋の蝶

に用うる意なれども、此處は春とは云ひ寂寥の景秋に似たるを以て用ゐたるならん。且つ青山紅袖、姿致映帶の上より、黃字可なり、蝴蝶、蛺蝶の意にては何となく落つかぬ心地すべし。太宗を文皇帝、玄宗を武皇帝と稱するは唐人の例なり。以上の詩篇皆轉句實字を以て上に接す。

(六) 虚 接

周弼曰く、虚接は第三句虚語を以て、前兩句に接す。亦語は實といへども意虚なるものあり、承接の間に於て略轉換を加ふ。反、正と相依り、順、逆と相應じ、一呼一喚、宮商自ら諧ふ云々と。前項に比較して虚實の異を知るべし。

答<sub>三</sub>韋丹<sub>一</sub>

靈 徹

年○老○心○閑○無○外○事○  
相○逢○盡○道○休○官○去○

麻○衣○草○坐○亦○容○身○  
林○下○何○會○見○一○人○

韋丹官に在りて詩を作り、歸休の意を述べて靈徹に寄す。依て之に答ふるに此詩を以てせるなり。起承は年老い心閑にして、外事に牽かれず、麻衣草坐以て身を寄するに足ると、自己の境遇を言ひ、轉結は他の身上に及んで、さて在官者に相逢ふて、其語るところを聞けば、何れも官を罷め祿を辭して、林下に退隱せんと云ふと雖も、其實官祿に戀々として、眞に急流勇退の計を決するもの無く、徒らに口にのみ清高を銜ふなり、能く林下に退きて、清風明月を樂むもの一人も見えずとなり。韋丹を諷する意最も切なり。相逢盡道休官去の語、想を設けて起承に接す、之を虚接となす。

江村即事

司空曙

罷○釣○歸○來○不○繫○船○  
縱○然○一○夜○風○吹○去○

江○村○月○落○正○堪○眠○  
只○在○蘆○花○淺○水○邊○

釣を罷めて歸來、船を繫がずして其中に打臥せば、恰も月落ちて眠るべし。たとへ風起りて、船を吹き去ることあるも、蘆花淺水の中に漂蕩するのみ、別に心を勞するほどの事無しと、何事も自然にまかせるといふ極めて樂天的の詩なり。縱然の虚字によりて、風の起ることを假想して意を成す、是虚接なり。不繫船の三字、既に轉結の進備を爲すところ亦注意すべし。要するに虚接は多く虚字を用ゐて、幹旋の妙を得るを要す。唐詩の佳なるものは實接多く、宋詩の妙は虚接に在り、兩者を比較せば思半に過るものあらん。

宮○人○斜○  
幾○多○紅○粉○委○黃○泥○

雍○裕○之○  
野○鳥○如○歌○又○似○啼○

成 大 詩 作

應<sub>レ</sub>有<sub>下</sub>春魂化爲燕

年<sub>上</sub>年飛入未央樓

宮人斜は長安の郊外にあり、多く宮女を葬るところなり。詩意、此處は生前紅粉を粧ひ、歌舞を事とせし數多の宮人が、死して黃泥に委棄せられしところなるを以て、塚上の野禽も歌ふが如く啼くが如く、相悲みて弔ふに似たりと、起承は其實景を詠じ、轉結は全く假想を寫す、曰く死者の幽魂年々春燕と化して未央宮に入りて棲むならんと、是れ實事にあらず、虚を以て接するなり。

海 棠

蘇 軾

東風嫋嫋汎崇光  
只恐夜深花睡去

香霧霏霏月轉廊  
高燒銀燭照紅粧

起承は春夜月下の景を寫して、崇光香霧等の字能く海棠を形容し、轉結、花の睡るを恐れて、銀燭を燒くと、假想の結構を用う。所謂

句 絶 言 七 章 一 第

擬人法なり。

飲<sub>二</sub>湖上<sub>一</sub>初晴復雨  
水光潋灩晴方好  
欲<sub>下</sub>把<sub>二</sub>西湖<sub>一</sub>比<sub>二</sub>西子<sub>上</sub>

山<sub>上</sub>色<sub>上</sub>空濛雨亦奇  
淡粧濃抹總相宜

晴時の水光潋灩、雨時の山色空濛、共に愛すべし、恰も美人の淡粧濃抹何れも相宜しきが如しと、西湖を以て西施の艷色に比す、亦假想の比喩なり。

三 峽 歌

陸 游

十二巫山見九峰  
朝雲暮雨渾虛語

船頭彩翠滿秋空  
一夜猿啼明月中

巫山十二峯は三峽の上であり、然れども江上より望見し得べきものは九峯に過ぎず、秋空に當りて彩雲嵐翠、船頭を壓す。宋玉神女の



り。紙は後漢の世に始めて製すと云へば、秦の時代は猶竹帛を以て典籍とせしならん。詩意、始皇儒者の古を師として今を譏るを憎み、天下の儒書を聚めて之を焼棄せしが、其煙燄の消すると共に始皇の帝業も亦滅亡し、關河寂寞として、始皇の宮殿は空しく鎖され、陵墓は人の顧みる無し。而して書を焼きたる灰燼、未だ冷かならざるに、陳勝、吳廣先づ亂を山東に唱へて、天下の英雄響應し、劉邦、項羽の如き元來書を讀まざる者なれども、共に兵を起して、秦を亡ぼせり。此に由て觀れば始皇が讀書人を恐れて、書を焼き儒を坑にせしは迂愚の極なりとなり。承句祖は始の義にして、龍は帝王の象、祖龍は始皇の隱語なり。史記に、明年祖龍死せんと始皇果して崩す。劉邦は漢の高祖にて、儒者を賤んじ、馬上安んぞ詩書を事とせんと云へり。項羽も亦少時大言して曰く、書は姓名を記するに足ると、

此二事を引きて劉項元來書を讀まずと云ふは、能く故事を融合したるものと云ふべし。

折●載●赤●壁●  
東●風●不●與●周●郎●便●

自●將●磨●洗●認●前●朝●  
銅●雀●春●深●鎖●二●喬●

赤壁は、吳の周瑜が、火攻の奇策を以て、曹操の大軍を敗りしところなり。東風實は東南風なり。詩に於ては文字の省略此の如きは妨げなし。二喬は當時美人の姉妹にて、姉を大喬と呼び、妹を小喬と呼び、大喬は孫策の妻となり、小喬は周瑜に嫁す。曹操曾て鄴都に於て銅雀臺を築き、多く美人を貯ふ。詩意、赤壁の古戰場に來りて、摧折せる矛戟の、沙中に埋没せるを拾得したれど、鐵質半銷毀して、何物たるを知らず。自ら泥を除き洗磨して、纔に前代の舊物たるを

賦を作りて、朝に雲となり暮に雨となることを説くと雖も、實は荒唐の妄談にして唯月下猿聲を聞くのみ、豈真に神女なるものあらんやとの意にて、乃ち神女の賦を借りて、意匠を成す。以上諸篇轉句皆想像上より結構を成して、實事にあらず。以て虚接の何たるを知るべし。

(七) 用事格

周弼曰く、詩中事を用うれば既に窒塞し易く、況んや二十八字の間に於てをや。尤も堆疊を難んず。若し融化せざれば、事を以て意と爲し、更に加ふるに輕卒を以てすれば、即ち里謠巷歌に隣すと、典故を引きて詩を作るの難きを云ふなり。後人詩を作る、故事を引用せざれば、讀書力無しとして之を輕んず。

然れども故事を用うるには、牽合附會を嫌ふ。融化自然の妙を得ざれば、却つて用ゐざるの勝れるに若かず。試みに盛唐諸家の絶句にして、人口に膾炙せるもの、故事を引かざるの作多し。學者宜しく意を此に致すべきなり。

周弼用事として擧ぐるもの十一首、中に就て焚書坑、赤壁、秦淮等は古跡憑弔の作にして勢ひ其當時の事を用ゐざるを得ず。此に據れば懷古、詠史等の詩は皆用事格なり。左に掲げて示さん。

- 焚書坑
- 竹帛煙消帝業虛
- 坑灰未冷山東亂
- 關河空鎖祖龍居
- 劉項元來不讀書

焚書坑は長安の傍なる驪山にあり。秦の始皇が書を焼き儒を坑にせしところなり。古は紙無く、竹を編み帛に書し、以て書史となせしな

り。紙は後漢の世に始めて製すと云へば、秦の時代は猶竹帛を以て典籍とせしならん。詩意、始皇儒者の古を師として今を譏るを憎み、天下の儒書を聚めて之を焼棄せしが、其煙焔の消すると共に始皇の帝業も亦滅亡し、關河寂寞として、始皇の宮殿は空しく鎖され、陵墓は人の顧みる無し。而して書を焼きたる灰燼、未だ冷かならざるに、陳勝、吳廣先づ亂を山東に唱へて、天下の英雄響應し、劉邦、項羽の如き元來書を讀まざる者なれども、共に兵を起して、秦を亡ぼせり。此に由て觀れば始皇が讀書人を恐れて、書を焼き儒を坑にせしは迂愚の極なりとなり。承句祖は始の義にして、龍は帝王の象、祖龍は始皇の隱語なり。史記に、明年祖龍死せんと始皇果して崩す。劉邦は漢の高祖にて、儒者を賤んじ、馬上安んぞ詩書を事とせんと云へり。項羽も亦少時大言して曰く、書は姓名を記するに足ると、

此二事を引きて劉項元來書を讀まずと云ふは、能く故事を融合したるものと云ふべし。

赤 壁  
折 戟 沉 沙 鐵 半 銷  
東 風 不 與 周 郎 一 便 上

杜 牧  
自 將 磨 洗 認 前 朝  
銅 雀 春 深 鎖 二 喬

赤壁は、吳の周瑜が、火攻の奇策を以て、曹操の大軍を敗りしところなり。東風實は東南風なり。詩に於ては文字の省略此の如きは妨げなし。二喬は當時美人の姉妹にて、姉を大喬と呼び、妹を小喬と呼び、大喬は孫策の妻となり、小喬は周瑜に嫁す。曹操曾て鄴都に於て銅雀臺を築き、多く美人を貯ふ。詩意、赤壁の古戰場に來りて、摧折せる矛戟の、沙中に埋没せるを拾得したれど、鐵質半銷毀して、何物たるを知らず。自ら泥を除き洗磨して、纔に前代の舊物たるを

認知せり。さて此一物によりて、史上有名なる赤壁の大戦を想ひ起したるが、當時周瑜に奇策ありと雖も、若し東北風起らずんば、如何にして曹操を破らん。周瑜の勝ちたるは、東北風の助に依るのみ。されば此風無きに於ては、曹操は直ちに進んで、吳軍を破り、大喬小喬の二美人を奪ひ、鄴都に携へ歸り、銅雀臺の深き處に貯へ置くならんと、春の字は李白の宮女如花滿春殿の春と同じく、事美人に關するを以て、情趣を添ゆるために用ゐしなり。議論は頗る奇想に屬すと雖も、詩に於て言ふべく、文に於て言ふべからず。要するに正論にあらざるべし。

集靈臺  
虢國夫人承主恩  
却嫌脂粉汚顏色

張祜  
平明騎馬入宮門  
淡掃蛾眉朝至尊

集靈臺は華清宮中に在り、玄宗の作る所なり。漢にも集靈宮ありしが、此に詠する所と異なり。虢國夫人は韓國秦國二夫人と共に、楊貴妃の姉妹にして、貴妃に蚤縁し、顯榮の地に列す。而も寵を恃み、色に誇りて、素面天に朝せり。婦人にして叨りに封爵を受るは僭なり。故に起手虢國夫人と特書して其罪を明かにす、春秋の筆法なり。且つ曉天馬に騎りて、宮門に出入するは、三公九卿の事にして、兒女子の爲さるる所、夫人の意氣揚々として之を爲すは、公卿を侮蔑して禮を知らざるなり。脂粉を施さずして、天子に謁見するは、美色を恃みて驕傲憚る所なきなり。通篇婉曲にして、一の激語なきも、痛快骨を刺すの妙あり。然れども是直ちに虢國夫人を詠するものにして、周弼が用事格の例として取るの意解すべからず。唯詠史の作として觀るべきのみ。或ひは此詩を以て杜甫の作るもの

と爲す。蓋し然らんか。

題 桃花夫人廟

杜 牧

細腰宮裏露桃新  
至竟息亡緣底事

脉脉無言度幾春  
可憐金谷墜樓人

桃花夫人は息夫人なり。息は周末の一小國にして、楚の亡すところとなれり。而して其夫人美色のため虜はれて楚王に寵愛せらるゝこと多年、子女を生むと雖も、亡國の怨を懷きて、遂に楚王と語を交へず。細腰宮は楚王細腰を好みて、宮中餓死多しの語に基き、楚の宮殿を指す。露井の桃花を以て、息夫人の艶色に比せしなり。脉々言無く幾春を度るは、息夫人の楚王と語らざるを云ふ。而して息國の亡ぶるは何事に依ると云へば、楚王色を好みて、夫人を得んと欲するがためなり。即ち夫人の艶色は息國の禍本なれば、夫人たるも

の、何ぞ生を敵國に偷むことを爲さん。須らく自ら引決して、息國の舊恩に報すべきなり。然るに楚王の寵を承け、子女を生むとは、其貞節に於て大に議すべし。此に比すれば晋の石崇の侍妾緑珠の如き、其の艶色のため石崇讒を蒙り、害に遭ふ時に及び、身を樓下に投じて、石崇の死に殉したる節義大に賞すべしと、緑珠を引ききて、息夫人に反襯せしむ。是用事の好例となす。金谷は石崇の園名なり。

長 城

注 遵

秦 築 長 城 比 鐵 牢  
焉 知 萬 里 連 雲 勢

蕃 戎 不 敢 過 臨 洮  
不 及 堯 階 三 尺 高

秦の始皇萬里の長城を築きて、鐵石の堅牢に比したるが、匈奴も之を憚りて、爾來臨洮の地を過ぎて、中國を侵すことなし。然れども始皇長城を築くがため、數十萬の徒卒を發して、民の疾苦を問はざ

るにより、衆怨を招きて、其社稷を亡ぼすに至れり。之に反して堯は土階三等、茅茨剪らずして、能く天下を治む。萬里雲に連る長城は却つて堯の土階に及ばずと、國を守るは山河の固にあらずして、徳に在りの理を説けり。

(八) 拗 體

七言絶句平仄の定式は既に述べたるが、拗體と稱して破格のものあり。其例は左の如し。

上皇西巡南京歌  
 誰道君王行路難  
 地轉錦江成渭水  
 出塞曲

六龍西幸萬人歡  
 天廻玉壘作長安  
 賈至

此二首前半は仄起の格にして後半は平起の格の平仄を用う。又平起の格にして、後半は仄起の平仄を用うるものあり。然れども一句の中、第二字と四字と同じからず、第二字と第六字と相同じく、所謂二四不同、二六對の法は犯さるるなり。次に一句の中の平仄全く近體と異なるものあり。

黃鶴樓送孟浩然之廣陵  
 故人西辭黃鶴樓  
 孤帆遠影碧空盡  
 惟見長江天際流

李白  
 烟花三月下揚州

此詩の第一句、故人の人の字は、宜しく仄なるべくして平なり。知らざるものは失聲と爲さんが、實は全篇拗體の詩なり。黃鶴樓も實

は仄仄平なるべくして平仄平なり。天際流も然り。碧空盡も宜しく  
平平仄なるべくして仄平仄となす。是れ天際流の平仄平と相對して、  
碧天の二字の平仄を相交換せるなり。要するに古詩の聲調を帯びて、  
尋常の近體と異なるところあり。

滁州西澗

獨○憐○幽○草○澗○邊○生○  
春○潮○帶○雨○晚○來○急○

韋應物

上○有○黃○鸝○深○樹○鳴○  
野○渡○無○人○舟○自○橫○

これ等の詩は二四不同、二六對の法に戻らずといへども、深樹鳴、  
舟自横の平仄平、晚來急の仄平仄は、正格の仄仄平、平平仄と同じ  
からず、猶拗體の部に屬すべきものなり。

白○旅○草○原○頭○望○京○師○

黃○河○水○流○無○盡○時○

李頎

秋○天○曠○野○行○人○絕○ 馬○首○西○來○知○是○誰○  
此詩に至りては京、流、盡、無、知、五字の平仄近體に入らず、

贈楊鍊師

道○士○夜○誦○蕊○珠○經○  
夜○深○經○盡○人○上○鶴○

鮑溶

白○鶴○下○繞○香○烟○聽○  
天○風○吹○入○秋○冥○冥○

近體の平仄を以て、此等の詩を律すれば、一句として格に入るもの  
なし。

要するに此の如き拗體は、古意古調を帯びて始めて可なるものなり。  
开を知らずして漫りに作るべからず。其詳細は更に古詩平仄の部に  
詳論すべし。

(九) 仄韻の詩

七言絶句の正體は必ず平韻を用うべし。若し仄韻を用うるときは、其平仄の式、尋常の絶句と同じからず、三體詩側體の部に左の作例を擧げたり。

營州歌  
營州少年愛原野  
虜酒千鍾不醉人

高適  
狐裘蒙茸獵城下  
胡兒十歲能騎馬

後半は絶句にして、近體の平仄に合するも、前は全く古詩の調なり。

山家  
獨訪山家歇還涉  
主人聞語未開門  
夏晝偶作  
南州溽暑醉如酒

長孫佐輔  
茅屋斜連隔松葉  
繞籬野菜飛黃蝶  
隱几熟眠開北牖

日午獨覺無餘聲

山童隔竹敲茶臼

清溪道士人不識  
洞門深鎖碧窓寒

高駢  
上天地下鶴一隻  
滴露研朱點周易

右の諸作を以て、近體絶句の定式と比較せば思半に過るものあらん。白樂天の集中には、往々仄韻にして、近體の絶句と相同じきものを見れども、以て準則となすべからず。之を要するに仄韻の絶句は、必ず拗體なるべく、拗體は必ず古意古調なるべしといふ事を記憶すれば足れり。



第二章 五言絶句

(一) 平仄の式

五言絶句は起句に韻を押まず、其の平仄は、七言の上二字を除去したるものとして可なり。例へば

仄起格

起 ● ● ○ ○ ● ●  
承 ○ ○ ● ● ○ ○  
結 ● ● ● ● ○ ○

轉 ○ ○ ○ ○ ● ●  
承 ● ● ● ● ○ ○

平起格

起 ○ ○ ○ ○ ● ●  
承 ● ● ● ● ○ ○  
結 ○ ○ ○ ○ ● ●

轉 ● ● ○ ○ ○ ○ ● ●  
承 ○ ○ ● ● ● ● ○ ○

の如し。而して第一字は平仄を變ずることを得るも、第二字は孤平

作詩大成

第二章 五言絶句

を嚴禁する七言の第四字の如し。例へは○○●●○を變じて●○○●○と爲すことを得るも、●○○●●○と爲すを得ず。然も第三字の仄を平となすは拗體に入るの第一歩にして、既に正格にあらざれば、容易に動かすを得ざるものなり。

題袁氏別業

主●人●不●相●識●  
賀知章

莫●謾●愁●沽●酒●  
偶●坐●爲●林●泉●  
囊●中●自●有●錢●

此詩の起句は、不相の二字平仄を轉換したるなり。

夜送趙縱

趙●氏●連●城●壁●  
揚

送●君●還●舊●府●  
由●來●天●下●傳●  
明●月●滿●前●川●

これは天の字仄なるべくして平なるも、未だ拗體と云ふべからざる

なり。

易水送別  
此地別燕丹  
昔時人已沒

駱賓王  
壯士髮衝冠  
今日水猶寒

此第二句は○○●●○なるべくして、●●●○○なり。蓋し初唐の時代に於ては、絶句の平仄未だ後世の如く嚴密ならざるがため、往々斯る作例あるなり。

尤も五言絶句は、七言と異なりて、古調を帯びたるもの多く、其平仄も近體の聲律を無視することあり。

子夜春歌  
陌頭楊柳枝  
妾心正斷絶

郭振  
已被春風吹  
君懷那得知

此題の如き古樂府の遺音にして、絶句と雖も實は古詩の一種なり。故に平仄も近體に由らざるを可となす。

南樓望遠  
去國三巴遠  
傷心江上客

盧僎  
登樓萬里春  
不<sub>三</sub>是故鄉人

これは近體五絶の正格にして、後世の遵奉するところなり。若し起句に韻を挿むときは、●●○○●●を●●●●○となし、三巴遠の○●●を變じて●●●となすときは、萬里春の●●●○を○●●○として相救ひ、江上客の○●●○●●○●●○とすることを得るなり。以上は専ら平韻の詩に就て述べたるものなるが、仄韻に至りては、七言の仄韻と同じく、平仄を拗して古調あるを要す。今唐宋諸家の作れる仄韻の五絶を左に示すべし。

第二十五章 絕句

以上は其一斑に過ぎずと雖も、近體の平仄と全く別なるを知るべし。時には近體の平仄と同じき仄韻の五絶あるも、極めて稀にして、猶古調を帯び、古樂府若くは俗謠に似たり。

珍○翁○	樓○巴○	明○春○	自○ <small>菩提</small> ○
重○田○西	上○山○望	月○巖○	步○ <small>月歸</small> ○
無○種○	捲○樓○雲	淨○瀑○	廣○ <small>化寺</small> ○
心○胡○寮	簾○之○樓	松○泉○	
人○麻○	時○東○	林○響○	
寒○結○	滿○秦○	千○夜○	
樓○草○	樓○嶺○	峰○久○	
弄○寄○	雲○樓○	同○山○	
明○林○朱	一○之○文	一○已○歐	
月○樾○	色○北○	色○寂○陽	
	熹	同	修

作詩大成

不○日○	古○結○	返○空○	日○相○
知○夕○鹿	城○廬○孟	景○山○鹿	暮○送○臨
松○見○	非○古○城	入○不○	飛○臨○高
林○寒○柴	疇○城○坳	深○見○柴	鳥○高○臺
中○山○	昔○下○	林○人○	還○臺○
但○便○	今○時○	復○但○	行○川○
有○爲○	人○登○	照○聞○	人○原○
巽○獨○	自○古○	青○人○	去○杳○
履○往○同	來○城○裴	苔○語○同	不○何○王
跡○客○	往○上○	上○響○	息○極○
		廸	維

昭 王 昭 君  
君 拂 玉 鞍  
今日 漢 宮 人

上 馬 啼 紅 頰  
明朝 胡 地 妾

此詩の如きは仄韻にして、平仄近體に協ふと雖も、語意共に淺く、極めて不用意の處、自然古調を帶ぶるものなり。太白に此例あるをもて、仄韻の詩も必ず近體の平仄を用うべしとするは大に非なり。

(二二) 古人の作例

五言の句は、二字を増して七言と爲すべからざるを要す。猶七言を減じて、五言と爲すべからざるが如し。若し増減し得るものなれば、字句に無用若くは不足のところある證據なり。五言絶句は語短うして意長く、言外に餘情あるを貴ぶ。一句を練ら

んよりは、先づ全篇の着想に就て工夫を要す。古人の佳作は、多く四句一意にして分割すべからざるの妙あり。例へば

伊 州 歌  
打 起 黃 鶯 兒  
啼 時 驚 妾 夢

無 名 氏  
莫 教 枝 上 啼  
不 得 到 遼 西

の如き、全首殆んど一句として讀むべし。詩意は言文一致とも云ふべき、極めて淺近の語なれども、餘情は脈々として、閨閣の少婦が遠征の良人を慕ふ心の切なるを想ふべし。而も四句鐵釘を以て、板に打付けたるが如く、彼此移動すべからず。若し之を移動すれば全篇の意破壊せられて、不通のものとなるべし。

春 眠 不 覺 曉

處 處 聞 啼 鳥  
孟 浩 然

夜○來○風○雨○聲○

花○落○知○多○少○

これを常語に譯すれば『春の朝、曉も知らずに寢過して、枕頭に朝日のうらくとさしこむ頃、フト目をさませば、窓外の處々に鳥の啼く聲頻りなり。好天氣の事と思はるれど、昨夜來風雨のありし容子なれば、折角咲きたる花も多少散りたるならん』となり。起承二句は現在を言ひて、轉句に過去の記憶を述べ、結句に落花の多少の想像を寫す。四句の變化は此の如しと雖も、其布置構結は、一句の移動を許さざるなり。而も一意連串して、字句を増減すべからず。五絶の作法は此等の詩より悟入すべし。

勸○君○金○屈○卮○  
花○發○多○風○雨○

滿○酌○不○須○辭○  
人○生○足○別○離○

手○武○陵○

此詩花發きて風雨多しの一句を除き、君に勸む金屈卮、滿酌辭するをもちゐず、人生別離足るの三句のみにても、意は即ち通ず。屈卮は把手のある盞にして、之になみくと酒を酌み、君に勸むるが敢て辭するを止めよ、人生は會者定離、斯く相遇ふて快談する機會も少ければ、十分に飲んで興を盡すべしとなり。されどもこれのみにては、日常の談話其まゝにして、何の餘情無し。故に花發きて風雨多しの一句を挿入し、好事魔多く、快友は遇ひ難しの意を述べ。突然別意の如くなれども、其實人生別離足るの句をして、餘情あらしむるに最も力あり。

美○人○怨○情○  
但○見○淚○痕○濕○

深○坐○李○白○  
不○知○心○恨○誰○

これも美人の愁容を見たるまゝに寫したるものなれども、無限の情趣を含めり。措語の上に就て云へば、此美人の貴族的なること、珠簾の二字にて盡せり。深坐の語窈窕嫺雅の態を現はして、深閨の淑女なるを知るべく。試みに深坐に代ふるに他の字を以てせよ、獨坐と云へば山寺の老僧、田野の閑人に似たる嫌ひあり。靜坐と云へば平凡に失して甚だ拙なり。默坐、孤坐、端坐何れも不可なり。但見の但は、不知の字と相對して、虚字の用法最も妙を極めたるもの。是亦他の字を以て代ふべからず。要するに全首二十字悉く自然に凝結して成りたるもの、如く、毫髮の投すべき間無し。是に至りて人力か天工か、得て辨ずべからざるの妙處あるを知るべし。李滄溟、太白を評して、五七言絶句に至りては、實に唐三百年一人なり、蓋し不用意を以て之を得たり、即ち太白も亦自ら其至る所を知らざりし

ならんと、嘆美したるが、不用意にして自然の妙に至るもの、絶句の上乗なり。杜甫に至りては、絶句を作るにも、多少の學力を用ゐ、多少の工夫を要す、故に自然の妙に至るもの甚だ少し。

武侯廟  
遺廟丹青落  
猶聞辭後主

杜甫  
空山草木長  
不復臥南陽

此詩の如き平仄は今體の正格なり。四句全對にして用意甚だ巧みなり。廟内の粧飾たる壁畫も丹青剝落して、廟外の草木は森然として繁茂し、幾百年の星霜を経たるや知るべからず。而して廟に祀られたる諸葛孔明其人は、漢室の恢復を志して、出師の表を上り、蜀の後主に辭し、幾たびか魏を伐ちたるも、遂に意の如くならず、再び

成大詩作

南陽の舊廬に歸臥するを得ざりき。成敗利鈍は顧みる所にあらず、斃れて後已むと云ひたる志を察するに、實に悲むべきものありといふ意を以て作りし詩なれども、稍板重澁滯の弊あるに似たり。

江碧鳥逾白  
今春看又過

山青花欲然  
何日是歸年

これは他郷に在りて春色の佳なるに對し、故郷を思ふの念ますます切なるを詠じたるものにて、起承の對話、巧を極めたり。然れども不用意の作と云ふべからず。要するに太白の絶句は、自然化成せるもの、如く、實に天工なり。杜甫に至りては、猶人工たるを免れず。詩を作るもの、此等の區別を知らざるべからざるなり。

題齊安壁

王安石

第二章五言絶句

此詩は四句全對にして、毎句眼前の景を叙したるのみ、別に意匠無く、律詩の前後を截去して、中間四句を取りたるもの、如し。

日淨山如染  
梅殘數點雪

風暄草欲薰  
麥漲一溪雲

牆角數枝梅  
遙知不是雪

凌寒獨自開  
爲有暗香來

暗香あるがために、雪にあらずして梅花たるを知ると云ふ頗る平凡の作なれども、宋詩の五絶として猶佳なるものなり。

西村  
遠近皆僧刹  
得魚無賣處

郭祥正  
西村八九家  
沽酒入蘆花

成大詩作

四邊皆僧刹に對して、魚を得るも賣る處無し、の句を案出せしものならんが、これ宋詩の魔道に墮つるところなり。漁夫の風流なる生活を寫して、却つて殺風景となれり。

尋胡隱君

高啓

渡水復渡水  
春風江上路

看花還看花  
不覺到君家

明三百年唯一の好絶句、其妙は不用意を以て之を得るに在り。此等の詩は強て作らんと欲するも、容易に得べからざるものなれども、五言の佳處は、こゝに存することを知りて、作らざれば不可なり。總て五絶は承結二句にのみ韻を押みて、起句は韻を用ゐざるが正格なり。七言の起承結三句に韻を押むを以て正格とすると異なれり而して拗體に至りては、通韻を用うるも妨なし。

第二章五言絶句

尋常の語、詩に入りて其妙此の如きものあり、之れを自然の天籟と云ふ。

江○水○三○千○里○  
行○行○無○別○語○  
京○師○得○家○書○

家○書○十○五○行○  
只○道○早○還○鄉○  
袁○凱

簡○舒○古○廉○  
君○居○我○巷○東○  
三○日○春○雨○深○

望○見○我○家○樹○  
相○思○落○花○暮○  
吳○錫○麒

家相近きも雨に阻せられて往訪するを得ざる事を述べ、言外に他を招くの意を寓す、極めて婉曲の筆にして又極めて風流の詩なり。



第三章 七言律

(一) 平仄の式及拗體

律詩の平仄は、絶句を二首聯ね後首を押落しにしたるに同じ、其定式は左の如し。

起聯	●	○	●	○	●	○	●	○
平起格	○	●	○	●	○	●	○	●
頸聯	○	●	○	●	○	●	○	●
腹聯	●	○	●	○	●	○	●	○
結聯	○	●	○	●	○	●	○	●
起聯	○	●	○	●	○	●	○	●
平起格	○	●	○	●	○	●	○	●
頸聯	○	●	○	●	○	●	○	●
腹聯	●	○	●	○	●	○	●	○
結聯	○	●	○	●	○	●	○	●

右の中毎句第一字第三字等は平仄何れにするも妨げ無しと雖も、第四字の孤平を忌むことは絶句と同じ。其變化は下に掲ぐる諸家の作例に據りて之れを知るべし。

古意 盧家少婦 金堂 九月初寒 催木葉 白狼河 音書斷 誰爲含愁 獨不見

海燕雙棲 沈佺期 十年征戍 玳瑁梁 丹鳳城 南秋夜 更教明月 照流黃

此詩を以て、前に掲げたる定式と参照すれば、其變化の一例を知る

べし。但獨不見の三字は○●●ならざるべからざれども、此處に仄三連を用うるの例は甚だ多し。尤も多くは入聲を用う。此の如きは猶正格として見るべきも、以下示すは拗體なり。

早朝大明宮呈兩省僚友  
銀燭朝天紫陌長  
禁城春苑曉蒼蒼  
千條弱柳垂青瑣  
百轉流鶯遶建章  
劍佩聲隨玉墀步  
衣冠身在御爐香  
共沐恩波鳳池上  
朝朝染翰侍君王

玉墀の二字平仄を轉倒す、此の如きは句中の一字を拗するものなれども、結末の二句は全く平仄を轉換し。王維の此題に和する七律も、全く此と同じく末の二句を拗せり。

夜別韋司士

高 適

此詩に至りては、腹聯と結聯と、位地を轉換して、始めて正格の式に合するものなり。

高館張燈復清  
只言啼鳥堪求侶  
無那春風欲送行  
黃河曲裏沙為岸  
白馬津邊柳向城  
勿怨他鄉暫離別  
知君到處有逢迎

九日使君席奉餞衛中丞赴長水  
節使橫行西出師  
鳴弓擐甲羽兒  
臺上霜威凌草木  
軍中殺氣傍旂  
預知漢將宣威日  
正是胡塵滅時  
爲報使君多說菊  
更將絃管醉東籬

此詩は起頭兩句全く平仄を拗せり。

前記の如き拗體は、初唐盛唐の作に於て甚だ多く、宋元明と時代の降るに従ふて、漸次見ること稀なり。今人に至りては斷じて之を許さず、蓋し唐初は近體の平仄未だ全く確定せざるがためならん。後世に至るに隨ひて、詩律益々嚴にして詩品は益々劣れり。李白の如きは全集中僅に十數首の七律、拗體七八首の多きに及べり。然れども後代の詩人一人として李白に勝るものなし。是に於てか知る、詩は其格調の高きを以て主となし、聲律の如きは、抑も末なるを。然れども今は此の法則を遵奉して作りしものにあらざれば、詩にあらずと爲す。故に之を論著すること爾り。

酌酒與君自寬  
白首相知猶按劍

人情翻覆似波瀾  
朱門先達笑彈冠

此詩の如きは四聯殆んど同一の一仄を用ゐたり。加之細雨濕、春風寒の三仄、三平を句尾に置くは、全く尋常の律詩と異なり。世或ひは下句に三平を用うるときは、上句に三仄を置きて相對すべしとて尋常の律詩にも之を用うるものあれども、并は拗體の何たるを知らざるなり。全體の上に於て平仄を拗するものにあらざれば、漫りに之を用うべからず。

草色全經細雨濕  
世事浮雲何足問

花枝欲動春風寒  
不如高臥且加餐

掖垣竹埤梧十尋  
落花生絲白日靜  
腐儒衰晚謬通籍

洞門對雪常陰陰  
鳴鳩乳燕青春深  
退食遲回違寸心

成 大 詩 作

杜子美の七律、此の如き拗體頗る多し。論者曰く、拗體式又之を變聲と云ふ、亦皆一定の平仄あり、平仄以て確指し難きも、音節以て熟按すべしと。又曰く七律の變此に至りて妙を極め、又此に至りて眞を極む。此山谷の所云繩削を煩はさずして自ら合するものなりと。又曰く、杜公夔州の七律、間拗體を用うるものあり、王有仲謂ふ、皆失意遺懷の作と。失意の作か得意の作か、得て知るべからざるも、規矩準繩の外に超脱して、其云はんと欲する所を云ひしなり。

衰 職 會 無 一 字 補

許 身 愧 比 雙 南 金

鳳 臺 上 鳳 凰 遊  
吳 宮 花 草 埋 幽 徑  
三 山 半 落 青 天 外

鳳 去 臺 空 江 自 流  
晉 代 衣 冠 成 古 丘  
二 水 中 分 白 鷺 洲

總 爲 浮 雲 能 蔽 日

長 安 不 見 使 人 愁

これは崔顥の黃鶴樓に擬して作りしものなるが、吳宮、晋代の一聯全く平仄を拗し、江自流、成古丘の如き平仄平を用ゐたるは、古詩の聲調を帯びたるものなり。

宋に至りては、黄山谷の如き喜んで拗體の律を賦せり、

黃 庭 堅

律 言 七 章 三 第

題 落 星 寺  
星 宮 遊 空 何 時 落  
詩 人 畫 吟 山 入 座  
蜂 房 各 自 開 戶 牖  
不 知 青 雲 梯 幾 級  
著 地 亦 化 爲 寶 坊  
醉 客 夜 愕 江 撼 床  
蟻 穴 或 夢 封 侯 王  
更 借 瘦 藤 尋 上 方

平仄も此に至りては殆んど古詩と擇ぶところなし。更に古詩平仄の部を参照せよ。

(二) 對 聯

律詩の生命とするところは對聯にあり。對聯とは白日、青天又は落花、流水の如き對語を以て作り、二句を一聯と爲す。律詩は中四句必ず之を用う。例へば

登樓  
花○近○高○樓○傷○客○心○  
錦○江○春○色○來○天○地○  
北○極○朝○廷○終○不○改○  
可○憐○後○主○還○祠○廟○

萬方多難此登臨  
玉壘浮雲變古今  
西山寇盜莫相侵  
日暮聊爲梁甫吟

右の錦江春色來天地。玉壘浮雲變古今の一聯を頸聯又は前聯と云ひ、北極朝廷終不改。西山寇盜莫相侵の一聯を腹聯又は後聯

と云ひ。之を合して中聯と稱す。律詩は必ず此中聯を有すべきものにして、これなければ律詩の資格を具備せざるなり。第一第二の句は起聯と稱するも、普通對句を用ゐず、若し之を用ゐるときは多く韻を押落しと爲す。左の例の如し。

望野  
西○山○白○雪○三○城○戍○  
海○內○風○塵○諸○弟○隔○  
惟○將○遲○暮○供○多○病○  
跨○馬○出○郊○時○極○目○

南浦清江萬里橋  
天涯涕淚一身遙  
未○有○涓○埃○答○聖○朝○  
不○堪○人○事○日○蕭○條○

これを雙起單結體と云ふ。又第一、第二は散句にして、第七、第八の句に對聯を用ゐたるものあり。

見王監兵馬使。說近山有白黑二鷹。羅者久取。竟未<sub>レ</sub>能<sub>レ</sub>得。王以爲毛骨有<sub>レ</sub>異。他鷹恐臘後春生。寒飛避<sub>レ</sub>暖。勁翮思<sub>レ</sub>秋

之甚。眇不可<sub>レ</sub>見。請<sub>レ</sub>余賦<sub>レ</sub>詩。二首 錄一

雲飛玉立盡清秋  
在野只教心力破  
一生自獵知無敵  
鵬礙九天須却避

不惜奇毛恣遠遊  
于<sub>レ</sub>人何事網羅求  
百中爭能耻不<sub>レ</sub>構  
兔藏三窟莫深憂

これを單起雙收體と云ふ。對句を以て結ぶは、意最も慎密を要す。又全首八句皆對聯より成るものあり左の如し。

登 高  
風急天高猿嘯哀  
無邊落木蕭蕭下

杜 甫  
渚清沙白鳥飛廻  
不盡長江滾滾來

萬里悲秋常作客  
艱難苦恨繁霜鬢

百年多病獨登臺  
潦倒新停濁酒盃

これを八句全對體と云ふ。雙起單結體は往々之あり、單起雙收體は少し、八句全對に至りては極めて稀にして、諸家の作中容易に見るべからざるものなり。蓋し作るとき難易の程度も之に準ず。對聯は自然の妙あるを要す、漫りに牽合して作りしものは誦するに足らず。白雲千里に對する青嶂萬尋などの句を以てするも、唯文字の上より白雲と青嶂、千里と萬尋とを排列したるのみにて、白雲千里は自然の語なれども、青嶂萬尋は自然にあらず。卑近の例を以て云はんは、飛脚の脚の對に座頭の頭を以てしたるは語意自然の妙ありと云ふべし。馬車の馬に牛鍋の牛、黄金餅に白玉餡なども亦妙對なり。古人の詩中より句法の學ぶべき對聯を求むるに

天○九○花○看○秦○遠○三○滄○金○日○渭○山○  
空○天○迎○院○地○樹○晉○海○闕○色○水○色○  
絕○閭○劍○祇○故○依○雲○月○曉○纔○故○遙○  
塞○闔○佩○留○人○依○山○明○鐘○臨○都○連○  
聞○開○星○雙○成○如○皆○珠○開○仙○秦○秦○  
邊○宮○初○白○遠○送○北○有○萬○掌○二○樹○  
雁○扇○落○鶴○夢○客○向○淚○戶○動○世○晚○

葉○萬○柳○入○楚○平○二○藍○玉○香○咸○砧○  
盡○國○拂○門○天○田○陵○田○階○煙○陽○聲○  
孤○衣○旌○唯○涼○渺○風○日○仙○欲○秋○近○  
村○冠○旗○見○雨○渺○雨○暖○仗○傍○草○報○  
見○拜○露○一○在○獨○自○玉○擁○衰○漢○漢○  
夜○冕○未○青○孤○傷○東○如○千○龍○諸○宮○  
燈○旒○乾○松○舟○春○來○煙○官○浮○陵○秋○

殘○溪○水○湘○楸○雲○  
星○雲○聲○潭○梧○收○  
數○初○東○雲○遠○星○  
點○起○去○盡○近○月○  
雁○日○市○暮○千○浮○  
橫○沉○朝○山○官○山○  
塞○閣○變○出○塚○殿○

長○山○山○巴○禾○雨○  
笛○雨○勢○蜀○黍○過○  
一○欲○北○雪○高○風○  
聲○來○來○消○低○雷○  
人○風○宮○春○六○繞○  
倚○滿○殿○水○代○石○  
樓○樓○高○來○宮○壇○

の如き是なり。湘潭雲盡以下の句は、第五字を拗したるものにて、

唐の許渾の喜んで用ゐるところ、之を名けて許丁卯の句法と云ふ。

然れども杜子美既に

負○鹽○出○井○此○溪○女○

打○鼓○發○船○何○郡○郎○

などの句ありて、第五字を拗せり。敢て丁卯に始まりしものにあらざるなり。

前例は多く實境を寫したるものにて、之を實寫の聯となす。雄健、高雅若くは偉麗の句は、實寫に多し。情を寫すものに至りては、格調自ら卑弱に傾き易し。これ學者の最も意を用うべきものなり。杜甫の如き大家も、實寫のものと情を詠するものと 比較すれば、自然に此別あり、亦理の免れざるところならんか。然れども實寫のみを専らにして、情を詠せざれば堆垛窒塞して、流動の氣を缺くことあり。故に周伯弼四實、四虛、前實後虛、前虛後實の説あり。四實とは中聯四句悉く實寫を以てし、四虛は四句悉く情を詠じ、前實後虚は前聯は實寫にして後聯は情を詠じ、前虚後實は之に反するものなり。兩句一意にして對聯を爲すもの、これを流水對又は走馬對と稱す。例へば

已將心變寒灰後  
買栽池館恐無地  
豈料光生腐草餘  
看到子孫能幾家  
の如く、率然之を讀めば對句たるを覺えず、而して自然に對を爲すなり。流動靈活の妙はありといへども、動もすれば虚字に累はされて、文語と混じり易き弊あり。

(三) 杜律の諸體式

七律は杜子美の最も長ずるところなり。因て左に杜詩の中より作例を取りて、七律の體式を説明し、前一章の足らざるところを補はん。

涪縣城積寺官閣  
寺下春江深不流  
含風翠壁孤雲細

山腰官閣迥添愁  
背日丹楓萬木稠



小○院○廻○廊○春○寂○寂○  
諸○天○合○在○藤○蘿○外○

浴○身○飛○鷺○晚○悠○悠○  
昏○黑○應○須○到○上○頭○

寺下の春江、山腰の官閣、對聯を以て起り。前聯の翠壁丹楓、孤雲萬木は、第二句の山の字を承けて其景を叙し。後聯の小院廻廊は官閣を承け、浴身飛鷺は起句の春江を説明し。結末は寺の字に接して結ぶ。これを立綱分寫の法と云ふ。寺、江、閣、山の四字は、一篇の大綱にして、起聯兩句の中にあり。而して逐次之を分叙し、綱立ち目舉りて、整然見るべし。

臘○日○常○年○暖○尚○遙○  
侵○凌○雪○色○還○萱○草○  
縱○酒○欲○謀○良○夜○醉○

今○年○臘○日○凍○全○消○  
漏○洩○春○光○有○柳○條○  
歸○家○初○散○紫○宸○朝○

口○脂○面○藥○隨○恩○澤○

翠○管○銀○罍○下○九○霄○

例年臘日には暖氣未だ容易に生ぜざるが、今年の臘日は暖氣非常に早く、萱草は青色を還して、雪を凌ぎ、柳條は春光を洩して芽を出せりと、前半四句はたゞ氣候の例年に異なるを説く。而して張氏の説によれば、大寒の後必ず陽春あり、大亂の後に必ず至治あり。獵日にして暖、是れ寒極まりて而して春、治極まりて將に亂れんとするの象、詩特に表出すと。依て後半臘日朝廷の光景を説き、上に諷するところあるなり。然れども其語句前後錯綜して、解すべからざるものあり。蓋し口脂面藥は、臘日天子より賜はる例にて、唇又は面に塗り寒凍を防がしむ、ヒソグスリの類ならん。翠管銀罍は、酉陽雜俎に盛るに碧鏤牙笛を以てすとある藥壺のことなり。九霄より下るは天子より賜はるを云ふ。乃ち後半の意味を釋すれば、朝臣の

列にある忝けなさ、臘日の常例により、天子の恩澤を蒙むり、翠管銀罌に盛りたるに脂面薬を宮中より賜はり、拜受して朝より退き、家に歸りて、良夜の一醉を謀ると。結聯より逆推して、第六、第五の句に及びて止む。作法最も奇なり。後に叙すべき事を前に叙す、之を倒挿化直の法といふ。化直とは直下に歴叙して、平凡に失し、板重の弊あるを救はんがため、故意に前後の位置を轉換するなり。特に歸家初散紫宸朝は紫宸朝散じて初めて家に歸るの意なれども、文字の位置顛倒して、頗る解し難し。これを倒装の句と云ふなり。

堂 成  
背 郭 堂 成 蔭 白 茅  
檉 林 礙 日 吟 風 葉  
暫 止 飛 鳥 將 數 子

緣 江 路 熟 俯 青 郊  
籠 竹 和 烟 滴 露 梢  
頻 來 語 燕 定 新 巢

これは變換避複の法なり。字の位置を變換して句法の重複を避るなり。起聯背郭成堂、緣江熟路に就て檢すれば背、成、緣、熟の四動詞は皆上にありて郭、堂、江、路の四名詞は皆下にあり。故に成堂、熟路の二語は字を顛倒して堂成、路熟と爲す。頸聯林礙日、葉吟風、竹和煙、露滴梢の四語皆同一の句法なり。故に之を變換して吟風葉、滴露梢と爲す。此法を知れば句法の重複を患へず。然れども古人金馬玉堂を變じて馬金堂玉と爲したる滑稽もあり。青松白沙を松青沙白とし、落花啼鳥を花落鳥啼の例に倣ひ、美人才子を人美子才とするも意通すべからず。腹聯は飛鳥數子を將ゐて暫く止まり、語燕新巢を定めて頻に來るの意なれども、句法亦新奇獨創なり。詩人此法を悟れば、平仄のために縛束せられて、何事も云ひ

傍人錯比楊雄宅

懶惰無心作解嘲

成 大 詩 作

得ざるの恨なかるべし。

十二月一日

即○看○燕○子○入○山○扉○  
短○短○桃○花○臨○水○岸○  
春○來○準○擬○開○懷○久○  
他○日○一○盃○難○強○進○

豈○有○黃○鸝○歷○翠○微○  
輕○柳○絮○點○人○衣○  
老○去○親○知○見○面○稀○  
重○嗟○筋○力○故○山○違○

これは虚擬隔應の法なり。何をか虚擬と云ふ、燕子の山扉に入り、黄鸝の翠微を歴、桃花水に臨み、柳絮衣に點ずは、悉く是れ陽春三四月の景物にして、題の十二月一日と相適はず。應に来るべき春を豫想して、虚中に結撰したるものにて、眼前の實景にあらず。之を虚擬の法と云ふなり。而して春來準擬開懷久の一句を以て、前半四句の想像を點明す。準擬は俗の心構へなり、春にもならば襟懷を開

律 言 七 章 三 第

暢して十分樂まんと待ち受くること久しの意なり。然れども老來故郷の親友知己の人々とも相遇ふこと稀にて、豫期せるほどの樂を得る能はざるを恐ると、感慨の意を寓す。一喜一憂交も至るの状想ふべし。句法の上より見れば第七句の一盃は第五句の開懷と相應じ、第八句の筋力の衰を歎じ故山と相負くは、第六句の老去親知と相應す。即ち句を隔て、相應するを以て隔應法と云ふなり。第五句の春來準擬は、全首の關鍵にして、前半は實景の如くなれども實は虚なり。所謂空中の樓閣、無中に有を生ず。而して後半は喜中に憂あり變化自在、端倪すべからざる奇作と云ふべし。

曲江陪鄭八丈南史飲  
雀啄江頭黃柳花  
自知白髮非春事

鳩鵲滿晴沙  
且盡芳樽戀物華

近侍即今難浪迹  
丈山才力猶強健

此身那得更無家  
豈傍青門學種瓜

これは虚字運用法を示せり。律詩中虚字少くして、漫りに實字を以て充填するものは、板重粘滯して流動の致に乏し。されども虚字の用法宜しきを得ざれば、平弱に流れ易し。此詩起頭二句實字を多く用ゐて、第三句以下虚字を用うるの準備を爲し、虚實相濟ふの法先づ成れり。之がため自知、且盡、即今、那得、難、更、猶、豈等の夥多の虚字を排列するも、平弱に失する患を免る。

所思

苦憶荆州醉司馬  
九江日落醒何處  
可憐懷抱向人盡

謫官樽酒定常開  
一柱觀頭眠幾回  
欲問平安無使來

故憑錦水將雙淚

好過瞿唐灩澦堆

此詩腹聯の平仄を全く拗す。苦憶の二字全篇を貫きて、句々皆懷慕の情を詠す。因て之を一氣到底法と名く。可憐、欲問、故憑等虚字の運用亦妙を極む。第二句は司馬の謫地にありて、常に樽酒を開くことを云ふ、即ち醉司馬の酔の字を承くるなり。九江、一柱は荆州の地にして、醒、眠は酔字と呼應し、司馬の一酔一醒、且つ眠り且つ覺むる状を想ふべし。我懷抱人に向ふて盡き、無聊の餘り、司馬の安否を問はんとするも、使者無きを以て、雙淚空しく江水に落ち、思を千里の外に托すと、子美此時蜀に在るを以て、錦江を引きたるなり、瞿唐峽の灩澦堆は巫峽にありて、大江の險所なり。錦江大江に合し巫峽を過ぎ荆州に入る、起句荆州の字亦九江、一柱、錦水、瞿唐、灩澦の諸地名の總提たり。

曲江飛減却春  
 一片花飛減却春  
 且看欲盡花經眼  
 江上小堂巢翡翠  
 細推物理須行樂  
 これは先意後象の法なり前半は花落ちて春残す宜しく落花を看て酒  
 を飲むべしとの意を述べ、後半は翡翠麒麟の實景を借りて、人生行  
 樂のみ何ぞ名利を求めんと歎息す。一片の花飛ぶすら春は既に幾分  
 を減ず、況んや萬點の花落ちるをや、何人か之を愁ひざらん、依て  
 更に落花の終りまで看るべしと、以上三句一連落花を看て、春を惜  
 むの情甚だ切なり。第四句漸く花を離れて酒の字を點じ、別に後半  
 の結構を起す。然れども愁人の二字傷多と呼應して、針線極めて密

風飄萬點正愁人  
 莫厭傷多酒入唇  
 苑邊高塚臥麒麟  
 何用浮名絆此身

なり。小堂は曲江の傍芙蓉苑の中において、天子の臨幸せられしと  
 ころなれども、今や寂寞人無く徒らに翡翠の巢ふあるのみ。翡翠は緋  
 にして赤き羽を有し、翠は青き羽を有せる小鳥なり。麒麟は石にて  
 作り、貴人の墓上に立つるもの、地に倒れて塚に香火無し。王侯將  
 相の富貴も、此等の光景を看れば、久しく恃むに足らず、更に人世  
 榮枯得失の理を推窮すれば、たゞ夫れ時に及んで行樂すべきのみ、  
 何ぞ名利のために此身を羈束せらるゝを願はんやと、感慨無量、張  
 季鷹の所謂我をして身後の名あらしむるは、生前一杯の酒に如かず  
 との意を申明せり。

曲江散雨  
 城上春雲覆苑牆  
 林花着雨臙脂濕

江亭晚色靜年芳  
 水荇牽風翠帶長

龍武新軍深駐輦  
何時詔此金錢會

芙蓉別殿漫焚香  
暫醉佳人錦瑟傍

曲江は長安の名勝にして、春花開くとき士女群遊、最も繁華を極む。特に玄宗の盛時に當りては、四海太平、上下酣熙、天子曲江の芙蓉苑に幸して、上己の日に金錢會を開くこと年々の例なり。金錢會とは、金錢を樓下に撒じて、衛士をして争ひ拾はしむるなり。而して宴を群臣に賜ひ、教坊の名妓、歌舞彈吹の歡を盡す。然るに安祿山の亂を経て、賊兵の蹂躪に遭ひ、肅宗位に即くに及んで、猶舊時の盛に復すること能はず。子美之を悲み慨きて此詩を賦せるなり。詩意は春雲城上より來りて、芙蓉苑の牆を覆ひ、四望暗澹として、一年の芳景も、晩色轉靜寂なり。林間の花は殘紅濕ひて、水上の萍は風に飄蕩せられ、先帝(玄宗)の禁衛たりし龍武軍は、新たに神武軍と

名を命せられ、天子(肅宗)の駕に扈して、今此にありと雖も、雨のために衛士出遊せず。何人も天子の駐輦を知らざるが如し。芙蓉苑の別殿には、宮女香を焚きて粧を凝すも、天子の幸を得ず。嗚呼此寂寞たる光景、陽春三月の時節とも覺えず、再び先帝開元の世の如き、太平の世界に遭ふて、金錢會を聞くの恩詔を蒙り、教坊の名妓を相手に酒を酌むは何の時ぞと。亂後の感傷殊に深く、咨嗟詠歎、無限の恨事を述ぶ。然れども表面は雨景の寂寥を述べたるもの、如く、全首を通じて、一の悲愁感傷の文字を着けず。之を即景寓情の法と云ひ、景に觸れて見る所を寫し別に一段の深情を言外に寓するなり。荇藻風に吹かれ水に漾ひて帶の如きは、綵舟の士女を載るなきなり。林花雨に濕ふて寂寞たるは、車馬の來らざるなり。此一聯穠麗の中に愴悽を含み、深漫の二字は衛士の無聊、宮女の薄命を形

容し盡せり。而して結末玄宗を憶ふの心特に切なり。  
此詩一本臘脂濕の濕を落の字に作る、王彥輔曰く、此詩嘗て壁間に題するもの濕の字蝸涎に蝕せられ、蘇東坡、黃山谷、秦少游及び佛印と之を見て補ふに、東坡は臘脂潤と爲し、山谷は老、少游は嫩、佛印は落と爲す。然れども終に濕の字の天然雨景に切合せるに及ばずと、詩人一字を下すの難き以て知るべし。若し今人をして補はしめば、褪となし冷となし染となし、又十人十色ならん。然れども纖巧に失せざれば、平凡に流る。濕字は到底動かすべからざるなり。

南 隣  
錦里先生烏角巾  
慣看賓客兒童喜  
秋水纔深四五尺

園收芋栗未全貧  
得食階除鳥雀馴  
野航恰受兩三人

白沙翠竹江村暮

相送柴門月色新

これを半密半疎の法といふ。前半四句は錦里先生の烏角巾、園中の芋栗、客に慣るゝ兒童、階に馴るゝ鳥雀等數層の意義を堆疊す是半密なり。後半は秋水に舟を泛べて月下相送るの一意を推拓して結ぶ。是れ半疎なり。密なるところ其濃重を覺えず疎なるところ其薄弱を覺えざるなり。前聯賓客を看るに慣れたる兒童は、賓客の至るを喜び、階除に於て食を興へらる鳥雀は馴れて階除に近くの意なれども、句法頗る奇なり。後聯は所謂流水對にて、深さ纔かに四五尺の水なれば、恰も兩三人を載せ得る小舟を泛べ得たりの義にて、纔、恰の二虚字、實に其妙を極む。虚字の用法を講ずるもの取りて模範と爲すべきなり。

閣 夜

歲○暮○陰○陽○催○短○景○  
 五○更○鼓○角○聲○悲○壯○  
 野○哭○千○家○聞○戰○伐○  
 臥○龍○躍○馬○終○黃○土○  
 此れは對起雄偉體なり。起聯排山倒海の勢あるを云ふ。先づ陰陽相  
 促して歲暮に迫り、客中天霽れて、霜雪の寒き光景を述ぶ。頸聯鼓  
 聲の悲壯は閣上霜空に響きて聞くとこゝろ、星影の動搖は閣下の江水  
 に映するを見るなり。腹聯は曉天に聞く所を寫す。戰伐のために壯  
 丁を徵募せらるゝ千家の父母兄弟別を惜みて慟哭し、漁郎樵夫も、  
 處々に夷歌即ち從軍の曲を唱へて、殺氣野に満てり。結末臥龍は諸  
 葛孔明にして、躍馬は公孫述なり、孔明は蜀の宰相、公孫述は蜀に  
 據りて帝と稱せしも、今や俱に死して黃土と化す。昔人既に見るべ

天○涯○霜○雪○霽○寒○宵○  
 三○峽○星○河○影○動○搖○  
 夷○歌○幾○處○起○漁○樵○  
 人○事○音○書○漫○寂○寥○

からず、又今日の時事憂ふべしと雖、世上の消息久しく絶えて知ら  
 ずとなり。全首を通觀するに、先づ晚景より夜を徹して曉に至るの  
 事を述ぶ、愁ひて眠らざるを知る。而して雄健悲壯以て之に加ふる  
 なし。

見○螢○火○  
 巫○山○秋○夜○螢○火○飛○  
 忽○驚○屋○裡○琴○書○冷○  
 却○遠○井○欄○添○箇○箇○  
 滄○江○白○髮○愁○看○汝○

疎○簾○巧○入○坐○人○衣○  
 復○亂○簷○前○星○宿○稀○  
 偶○經○花○藥○弄○輝○輝○  
 來○歲○如○今○歸○未○歸○

これは結語雄偉體なり。而して起句の平仄を拗すると共に、星宿稀、  
 歸未歸、平仄平を用ゐて、聊か古調を帶ぶ。前六句は専ら螢を詠じ  
 て、形容の妙を得たるも、末二句は自己の身上に就て、無量の感慨



を述べ、客中漂泊居處定まらず、來年郷に歸り得るや否やを説き。前六句の喁々たる細響、此に至りて洪鐘一敲、衆山皆響くの態あり。後聯螢火の形容は最も精妙にして、詠物の軌範と爲すべし。

送李八秘書赴杜相公幕

青○簾○白○舫○益○州○來○  
石○出○倒○聽○楓○葉○下○  
貪○趨○相○府○今○晨○發○  
南○極○一○星○朝○北○斗○

巫○峽○秋○濤○天○地○迴○  
櫓○搖○背○指○菊○花○開○  
恐○失○佳○期○後○命○催○  
五○雲○多○處○是○三○台○

これは對結整練法なり。黃生曰く、起語輕秀、接句猛健、三四更に奇險、五六稍率、七は突然として轉じ、八は悠然として合し、對結を用うと雖も、筆意其頓挫を極むと、確論なり。青簾白舫は李秘書の乗れる官船にして、巫峽より益州に入るや、秋濤奔盪天地も廻轉

するが如く、奇巖江中に突出したるところ、其下に楓葉の落る聲あり、櫓を搖かして岸上の菊花を背指するは、舟行の急なるがためなり。而して相公の幕に趨くの期に後れて、再度の急使に促がさるゝを恐ると、舟行の急なる所以を述べ、結聯は、南極の一星北斗に朝するを以て、李の杜相公に謁するに比し、五雲三台を以て、天子の寵命を受くる大臣たることを讚稱し、對偶整齊極めて精練の作なり。且つ南極と北斗、五雲と三台、各句中に對語を有するは、奇筆と稱すべし。

第四章 五言律

(一) 平仄の式及拗體

五律の平仄は每句七律の上二字を截去せるなり。但七律にありては起句に韻を押しを以て正格とし、五律は之に反するの差あるのみ。例によりて其定式を示すべし。

	仄起格								
起聯	●	●	○	○	○	●	○	○	○
頸聯	○	○	○	○	○	●	○	○	○
腹聯	●	●	○	○	○	○	○	○	○
結聯	○	○	○	○	○	○	○	○	○
平起格									
起聯	○	○	○	○	○	○	○	○	○
頸聯	○	○	○	○	○	○	○	○	○
腹聯	○	○	○	○	○	○	○	○	○
結聯	○	○	○	○	○	○	○	○	○

若し起句に韻を押しときは、仄起格の起句●●○○○平起格の起句○○●●○となる。第一字は平仄何れにても自在なるが、第二字は七言の第四字と同じく孤平を許さざるを以て、●○○●○の句を作るべからず。我邦の詩人王朝時代より徳川三百年を経て、未だ之を悟るもの少く、往々此病を犯せり。但

●○○●●を變じて●○○●●となす

●○○●●を變じて○○●●●となす

●○○●●を變じて○○●●●となす

●○○●●を變じて○○●●●となす

●○○●●を變じて○○●●●となす

●○○●●を變じて○○●●●となす

●○○●●を變じて○○●●●となす

●○○●●を變じて○○●●●となす

成 大 詩 作

の聯句を變じて

となすは一種の拗體にして、所謂許丁卯式なり。

押韻の句にして、第二字平、第四字仄なるものは、第一字必ず平を用う○○●●○○の如し、又第二字仄第四字平なるものは、第一字平仄自在なり○○●●○○若くは●●○○の如し。

五律は七律に比して平仄更に嚴密なれども、唐宋の名家の作にも往々之を拗するものあり。甚しきは全く古詩の平仄と異ならざるものを見る。左に其例を示さん。

題 江 夏 修 靜 寺  
我 家 北 海 宅  
宮 庭 無 玉 樹

作 寺 南 江 濱  
高 殿 坐 幽 人  
李 白

律 言 五 章 四 第

平 書 帶 留 青 草  
送 張 舍 人 之 江 東  
張 翰 一 江 東 去  
天 清 雁 遠  
白 日 行 欲 暮  
吳 州 如 見 月  
行 歌 入 谷 口  
攀 崖 度 絕 壑  
雲 從 石 上 起  
淹 留 未 盡 興

寂 琴 堂 不 成 春  
寂 寞 不 成 春  
正 值 秋 風 時  
海 濶 孤 帆 遲  
滄 波 杳 難 期  
千 里 幸 相 思  
路 盡 無 人 躋  
弄 水 尋 迴 溪  
客 到 花 間 迷  
日 落 羣 峯 西

右の諸篇は、中四句對聯を用うるところ、律詩と異ならざれども、平仄は古詩なり。是に於て古詩とするものと、律詩とするものとの二者あり。趙宦光は對聯の有無を論せず、平仄の律に入るものを以て律詩となし。楊用修は對聯無きものを以て律詩と爲さず。要するに律詩の具備すべき必要條件は、平仄の定式に協ふと、對聯との二者にして、其一を欠けば律詩たるの資格なきもの、如くなれども、前例の諸篇、古來多く律詩の部に入る。拗體の律詩なるものありとすれば、亦妨げなかるべし。

(二) 杜律の諸體式

五律は諸家の作例甚だ多しと雖も、體式の完備せるは杜詩に若くはなし。依て其一斑を左に掲げん。

登 兗 州 城 樓

東 郡 趨 庭 日  
浮 雲 連 海岱  
孤 嶂 秦 碑 在  
從 來 多 古 意

南 樓 縱 目 初  
平 野 入 青 徐  
荒 城 魯 殿 餘  
臨 眺 獨 躊 躇

これは四實の法なり。中四句皆實景を叙す。東郡は今の山東省にして、兗州城は其中にあり。杜子美の父杜閑、此州の司馬となりしとき、子美猶弱冠、父を省して此に至る。趨庭は家庭の訓を受るの故事なり。先づ筆を此に起して、登臨地理を按ずることを述ぶ。浮雲は東海及び泰山に連りて、平野は青徐二州に入りて濶大なり。泰山には秦皇の功德を記せし碑石あり、兗州の近郊には、春秋魯の時代にて建てし靈光殿の舊基を存す。依て古を懷ふの意を發して、願望低

徊すとなり。前聯の海岱、青徐は東西數千里、後聯の秦碑、魯殿は古今幾千歳の事を詠じ。古意の二字後聯を收め、臨眺の二字前聯を收め、而して縦目の字と相呼應す。作法極めて嚴密なり。且つ在、餘の二虚字、實景中に情を含みて、古意を迫出するところ、最も意を注ぎて觀るべきなり。ハイカラ的に云へば、前聯空間の觀念を述べ後聯は時間の印象を示すものと云ふべし。

灑・頽・堆  
巨・石・水・中・央  
沈・牛・答・雲・雨  
天・意・存・傾・覆  
干・戈・連・解・纜

江・寒・出・水・長  
如・馬・戒・舟・航  
神・功・接・混・茫  
行・止・憶・垂・堂

これは四虚の法にて、中聯四句専ら情を述ぶ。灑頽堆は瞿塘峽に在

りて、巨石大江の中央に突出し、江水漲れば没して、舟其上を過ぎ、江水減すれば出で、舟行を妨ぐ。舟人其出沒の度を檢して進退を決す。灑頽馬の如くなれば下るなかれの諺あり。石の出る馬背の大に似たるは既に覆舟の禍あるを云ふなり。而して此を過るもの皆牛を沈めて水神に献じ、以て航行の安全を禱る、神若し怒れば雲を呼び雨を起して覆沒の患あるがためなり。蓋し天道は人をして時々傾覆の禍あるを知らしめて、安全に狃るゝを許さず、随つて造物者亦太古より此巨石を混茫たる水中に接着せしめたり。我今干戈争亂の日に當り、成都より夔州に下るに、處々に舟を泊し、幾たびか纜を解きて、此危険に臨み、魂驚き心悸して、戦々兢兢々、行止を慎しみ、千金の子は堂に垂せずの戒を想ふとなり。即ち起承二句の外は悉く情思にして感慨甚だ深し。殊に天意、神功の句、灑頽堆を兼ねて、

成大詩作

君臣太平の安に狂れ、天の警戒を忘れ、亂世に至れることを述ぶ。誰か云ふ性靈を主とするもの、平弱に流れ易しと、悲壯沈鬱此の如くなれば、亦可ならずや。

昔聞洞庭水  
吳楚東南坼  
親朋無一字  
戎馬關山北

今上岳陽樓  
乾坤日夜浮  
老病有孤舟  
憑軒涕泗流

これは二實二虚の法なり。吳楚、乾坤の一聯は實景として、親朋、老病の一聯は情思なり。洞庭は禹域第一の大湖にして、其名を聞くこと久かりしが、今や湖畔の岳陽樓に登り、其實境に臨めば、東南吳楚を析開して積水渺茫、乾坤も日夜水中に浮漾せるが如し。此茫

律言五章四第

々たる天涯に流落せる我身は、親戚朋友より一字の音書も寄せられず、老病の身を孤舟に托して、愈々落寞の悲に堪へざるなり。泥んや時事益々非にして、關山の北、長安の帝都は、今尙賊勢猖獗、戎馬紛々たるをや。乃ち軒楹に倚りて遙かに天涯を望み、涕泗の流るゝを覺えずとなり。元來前實後虚は、龍頭蛇尾の弊に陥り易きものなり。特に此詩の前聯吳楚乾坤の一聯は、凌滄搖岳の氣勢を備へて、局面濶大、接するに尋常の句を以てすれば、忽ち前後の權衡を失すべし。而も親朋、老病の兩句、性情を主とすと雖も、前聯に劣らざる氣勢を有し、毫も惰氣無し。七八に至りて更に手筆を放開し、雄健悲壯前者に陪す。爲めに全篇を振起して、千古を凌轢するの概あり。

野望  
清秋秋不極

迢遞起層陰

遠水兼天淨  
葉稀風更落  
獨鶴歸何晚

孤城隱霧深  
山廻日初沈  
昏鴉已滿林

これは通首全實の法なり。胡應麟曰く、律詩句々景を寫せば、貌、  
豐碩と雖も、往々之を繁雜に失す、又云ふ、景物を累寫して、言外  
の意なくんば、則ち堆積窒塞、意味寡し、此詩、清秋、層陰、水天  
城霧、風葉、山日、歸鶴、昏鴉、首より尾に至りて、寫景にあらざ  
るなし、而も寄托遙深云々と、

起句の清風は明なり、接句の層陰は暗なり、層陰起りて野望を妨ぐ、  
暗を以て明を害するなり。遠水天と淨きは明なり、孤城霧に隠る、  
は暗なり。已に稀なるの木葉を風更に吹落すは明なり、遠山日の沈  
むは暗なり、獨鶴は君子の未だ處を得ざるが如く、昏鴉は小人得意

の地を占むるに似たり。一明一暗、以て實景を寫し、獨鶴、昏鴉亦  
見るところによりて感慨を寓し、寫景にして情に歸到す亦作法の秘  
を悟るべし。

擣衣  
亦知戍不返  
已迎苦寒月  
寧辭擣衣倦  
用盡閨中力

秋至拭清砧  
况經長別心  
一寄塞垣深  
君聽空外音

これは通首全虛の法なり。空閨の女子、其夫の邊地を戍りて、今秋  
も亦返らざるを知り、擣衣の時節、夫の寒を思ふて、砧杵を拂拭し、  
衣を寄するの準備を爲す。苦寒の時は既に近きて、別離の苦は久し  
く積めり。擣衣の勞倦を辭せずして、一刻も早く遠き邊塞に衣を寄

せんとの心専らなれば、全力を用ゐて、衣を擣つこと、砧聲を聞き  
て知るべしと、全首想像を以て結撰す。深厚の思、纏綿の情、所謂  
性靈派の生命とする所なり。先づ擣衣に就て、其人其時其心其勞、  
其聲を順次想像して寫し來りしところ、意境の精密を見るべし。

禹廟空山裏  
荒庭垂橘柚  
雲氣噓青壁  
早知垂四載

秋風落日斜  
古屋畫龍蛇  
江聲走白沙  
疏鑿控三巴

これは疊累意二の法なり。禹廟は巴峽に在り、荒庭の橘柚を見て、  
禹貢の所謂厥包橘柚錫貢の事を想ひ、廟壁畫く所の龍蛇を見て、禹  
の水を治め龍蛇を驅りしことを思ひ、青壁に生ずる雲氣を望み、白

沙に走る江聲を聞きて、四載の勞、開鑿三巴を控ゆるの功烈を知る。  
されば遺廟をして此の如く荒涼ならしむるは、深く慨すべきことな  
りと、四載は禹の水を治むるに方り、水行には舟に乗り、陸行には  
車に乗り、泥行には橋に乗り、山行には輦に乗りしを云ふ。而して  
中聯皆寫景所謂四實の法なれども、橘柚、龍蛇は廟内に屬して、起  
兩句を承け、雲氣、江聲は廟跡に屬して結二句に接す。寫景を疊み  
て其意を兩分せるなり。

送翰林張司馬南海勒碑  
冠冕通南極  
詔從三殿去  
野館濃花發  
不知滄海使

文草列上台  
碑到百蠻開  
春帆細雨來  
天遣幾時廻



これは濶大半細の法なり。高官を帯びて、南海に至り、碑を立て、百蠻に示すと、第一句第四句之を述ぶ。上台に居りて文章を掌り、詔を拜して三殿より去ると、第二第三の句之を述ぶ。前半四句題意を釋して、毫髪も遺す所なし。而して後聯は途中の景を寫して、深婉綿麗の致を極め、結語滄海の遠き、歸期の近からざるを言ひて、深く其人を思ふの切なるを見る。李夢陽曰く、前半寫得て濶大なれば、後半必ず須らく深細なるべく、方に流れて粗豪の一派に入らずと、所謂濶大とは、三殿百蠻の語にして、深細は濃花細雨の一聯なり。按するに起聯は總提として、第三句は去る處より寫し、第四句は到る處に就て寫し、第五句は陸路、第六句は水路、結聯歸時に到着す、用意極めて密なり。

宿白沙驛

水宿仍餘照。驛邊沙舊白。萬象皆春氣。隨波無限月。これは逐句相生の法なり。水上の旅行、舟を泊して日未だ沒せず、依て岸上を願望するに、人煙起りて客亭あるを知る。亭あればこゝに驛あり、驛の邊は其名の如く沙白く、之と相映帶して湖水の外は陸地の新草青々たり。乃ち草色を看て、萬物春に遭ふを知り。萬物に對して身は是れ眇たる一孤客、扁舟を泛べて茫茫たる煙波に隨ひ萬里水上の月を逐ふ。或ひは漸々南溟の際涯なきほとりに漂泊するならんかと、句々連接して、節々枝を生じ、枝々葉を生ずるの妙あり。南溟は莊子の寓言に本きて、天涯淪落の感を寓せるなり。

人煙復此亭。湖外草新青。孤槎自客星。的的近南溟。

今 月 夜 鄜 州 夜 月  
遙 憐 小 兒 女  
香 霧 雲 鬢 濕  
何 時 倚 虛 幌

閨 中 只 獨 看  
未 解 憶 長 安  
清 輝 玉 臂 寒  
雙 照 淚 痕 乾

これは對面生情の法なり。此時子美の妻子鄜州にあり。故に月に對して妻子を思ひ、今夜此明月を、我妻子は如何に物淋しく見るやらん。殊に幼少なる兒女は、未だ此父の居る長安を慕ふ情を解せず。無邪氣なるが却つていぢらしう。妻は雲鬢の香霧に濕ひ、玉臂の清輝に照されて寒さをも厭はず、夜ふくるまで眠らずに、思ひを月に啣つならん。さるにても故郷に歸りて、夫婦打揃ひ、此明月を賞して、涙の乾くは何時なるぞと、情思綿邈、詞旨婉切なり。古人評し

て曰く、月に對して家を思ひ、偏に想ふて家人月を看るの思に到り、已に是一層を進む。併せ想ふて兒女未だ思を解せず、以て閨中の人  
の必ず思ふに至る、是二層を進む。又想ふて月に對し愁を舒ぶる状  
に到り、是三層を進む。今夜の涙を寫さず、反つて後日涙乾くこと  
を寫す、是四層を進む。逐層皆對面より寫來りて、筆法奇創なりと。  
而して雲鬢、玉臂の一聯清麗悲婉真に是鍾情の極。前聯の流水對、亦  
是靈活比なし。

以上杜律に就て其一斑を擧るに過ぎずといへども、以て體式の如何  
を知るべし。初學之を熟誦諳知して筆を下さば、自ら望洋の歎を免  
るべし。

五律は其聲律に於て、又其體式に於て、七律より嚴なるが如し。然れども時に或ひは其平仄を拗し、或ひは一の對聯を用ゐず、古詩と毫も異ならざるものあり。依て之を變體と名け、二三の例を擧ぐべし。

夜泊牛渚懷古

李白

牛渚西江夜  
登舟望秋月  
余亦能高詠  
明朝挂帆席

青天無片雲  
空憶將軍  
斯人不可聞  
楓葉落紛紛

牛渚は今の安徽省太平府の江中にあり。昔謝尙此地の將軍となりて、秋夜舟を泛べ、月を賞せしが、江上人あり、詠史の詩を朗吟す。謝尙其人を引見するに即ち袁宏と云ふもの、共に談論して、大に其才

學を愛し、幕下に置く。袁宏の名聲これより揚れり。李白其舊跡を尋ねて、江山依然、明月昔に異らざるも、才を憐れみ客を愛する謝尙其人無く、袁宏の如き才を抱くと雖も、人に知られざるを悲みて此詩を賦す。余も亦高詠すと、自ら袁宏に比し、斯人聞くべからずと謝尙無きを歎じ。明朝帆席を掛けて、此一知己無き地を去らんとの意を示す。調格甚高く、感慨亦深く、實に古今の絶唱なり。而して古來詩を選するもの、これを五律として採る。平仄は正に律詩の定式に協ふと雖も、全首一の對聯無し。古詩か律か、到底判定すべからず、依て假に變體の五律となすなり。

終南別業  
中歲頗好道  
興來每獨往

晚家南山陲  
勝事空自知

成 大 詩 作

行○到○水○窮○處○  
偶○然○值○林○叟○

坐○看○雲○起○時○  
談○笑○滯○還○期○

王維佛に歸して、夙に跡を物外に寄す、故に此詩幽を窮め玄に入り、天機の到るところ、自ら流出す、然れども天分に山らざれば隻語を得べからず、初學の漫りに學ぶべきものにあらざるなり。而して其平仄は、定式の外に超脱し、所謂拗體の一種なり。周弼の三體詩取りて一意の格と爲す。蓋し一氣直下、水到りて渠成るの妙あるを以てなり。

晚泊潯陽望廬峯

挂○席○幾○千○里○  
泊○舟○潯○陽○郭○  
嘗○讀○遠○公○傳○

名○山○都○未○逢○  
始○見○香○爐○峯○  
永○懷○塵○外○蹤○

東○林○精○舍○近○

日○暮○但○聞○鐘○

此詩亦平仄を拗し、對聯に意を用ゐず、純然たる古詩なり。然れども周弼は一意の格として五律中に採録せり。潯陽は今の九江府の江邊にして、上に廬山あり、香爐は其一峯にして秀翠天に參す、麓に東林寺あり、晋の高僧遠公の居りしところ。浩然其高風を慕ふて、世の相隔るを歎す。結句餘情、脉々絶へずと雖も、前半四句、一氣直下、應接に暇あらざるところ更に妙なり。長江を遡りて、此處に至るまで、兩岸唯洲渚蘆荻のみ。名山都て未だ逢はずは能く其實境を寫せり。潯陽に泊して廬山を見るに及んで、何人も狂喜せざるを得ず。本地を経て益々此詩の妙を悟るべし。

(四) 排 律

律言五章四第

老已楚蘇幾五稻處才醉劇未  
吟用筵武年嶺梁士高舞談負  
秋當辭元遭炎求禰心梁憐幽  
月時醴還鵬蒸未衡不園野棲  
下法日漢鳥地足俊展夜逸志

病誰梁黃獨三蕙諸道行嗜兼  
起移獄公泣危苡生屈歌酒全  
暮此上豈向放謗原善泗見寵  
江議書事麒逐何憲無水天辱  
濱陳辰秦麟臣頻貧隣春真身

成大詩作

乞白龍文聲筆昔  
歸日舟彩名落年  
優來移承從驚有狂  
詔深棹殊此風客  
許殿晚渥大雨

寄李十二白二十韻

遇青獸流汨詩號  
我雲錦傳沒成爾  
夙滿奪必一泣誦  
心後袍絕朝鬼仙  
親塵新倫伸神人

甫

排律は七言にもありと雖も、人多く作らず。五言を以て主と爲す。其平仄、對聯は普通の律詩と異なることなく、たゞ重疊聯接して、十句以上數百句に至るものあり。長短によりて局面に廣狹あり。布置結構亦之に副ふ。左に一二の例を擧ぐ。

莫怪恩波隔

乘槎與問津

排律は段落の分明を要す。此詩第一段十句、太白の文才尋常に卓越して、名聲大に揚り、終に天子の知る所となりて殊遇を蒙むることを云ふ。白日以下第二段十句、寵恩の盛なるを辭して、乞暇野に下り、杜甫と交を訂して、詩酒の樂を縱にすることを言ふ。才高以下第三段十句は才高うして讒言に遭ひ、身貧うして窮途に哭し、蠻地に謫せらるゝの苦を云ふ。蘇武以下第四段十句は太白の忠誠他なきを明かにして其冤を辯じ、併せて其老病流落の身を憐れむ。太白の心事これによりて明白、辯護に力めたりと云ふべし。古人評して、天壤の間、公道を維持し、元氣を保護するの文字と云へるは眞に是なり。而して對仗の齊整、議論の正大と相待て、詩聖の詩仙に贈る作に負かずと云ふべし。

今○空○衣○壞○溝○螢○藥○未○夜○浮○  
秋○夏○濛○濛○潤○簷○溢○飛○醜○憂○永○雲○  
雨○久○迷○香○聞○池○明○時○荒○燈○會○  
排○無○遠○偏○瓦○魚○闇○須○楚○相○消○  
悶○雨○望○著○墮○出○庶○焙○菊○守○對○

從○蕭○書○漲○天○蛙○舟○直○愁○鼓○  
秋○瑟○蒸○水○低○鬧○閑○恐○深○笛○  
却○送○蠹○見○塞○雜○任○敗○酒○賽○  
陸○少○寒○欲○堤○雁○疎○自○吳○細○西○  
晴○聲○生○平○征○更○橫○航○傾○城○

游

これは二十句十韻なり。

秋天霖雨の狀を盡して餘蘊無し。

排律は對聯に力を用うべく、句々鎔鍊を経て、渣滓を淘汰せざれば  
精金美玉の中に、一の瓦礫あるも、總體の美觀を損するの憾あるべ  
し。初學之を學ばんと欲せば、普通四韻の律を自由に作り得らるゝ  
後、五韻、六韻乃至十韻を限りて練習すべきなり。

\* \* \* \* \*  
\* \* \* \* \*  
\* \* \* \* \*

以上既に近體の絶律に就て其大要を録せり。猶六言の絶律ありと  
雖も、其平仄は七言の第五字を除きたるものと同じく、以て類推  
すべし。而も六言は人の多く作らざるところなれば別に標目を掲  
げて之を説かず。又邦人中五七言の絶律に仄韻を用うるものあれ  
ども、唐宋元明を通じて絶て無きところなり。故に之を著録せず若  
し之を作らんと欲せば、絶句の仄韻に倣ひて、其平仄を拗すべし。

然るときは古詩の一派に屬して、復律詩にあらざるべし。學者之  
を諒せよ。

【春】

春○開○明○社○奠○神○人○御○天○彌○屠○梅○  
 初○草○德○稷○鼎○皇○日○明○慶○勒○蘇○花○  
 味○  
 陽○ 握○聖○肇○樞○  
 春○誅○乾○功○祖○原○  
 群○綱○  
 嬉○醜○ 握○則○開○  
 春○ 關○符○地○基○  
 梅○鴻○  
 遊○花○荒○肇○鼎○神○  
 春○節○ 基○命○州○  
 定○  
 春○ 乾○體○建○如○  
 陰○ 坤○元○極○神○  
 春○ 寒○

【紀元節】

酒酒會節堂正月五日  
四民月令、梅花酒元日之を取れば老を却くと  
 元日之を飲めば瘟氣を除き鬼氣を屠絶し人魂を蘇醒すべしと  
 藏經、元日彌勒生ず大佛會を行ふと、  
 宋の大中祥符元年紀して正月三日天書下る日を以て天慶節とな  
 し、特に宴樂せしめ、京師燈を燃く、  
 唐の永昌元年正月四日明堂に御して政を布き、九條を頒ちて百  
 官に訓ゆと、即ち政事始なり

【新年】

景○花○白○絳○堯○紀○拜○歲○元○  
 雲○雪○獸○老○冀○歲○年○旦○朝○  
 歌○集○樽○生○ 功○  
 椒○ 夏○四○三○  
 花○紀○正○始○元○  
 酒○肇○  
 祥○正○改○三○  
 始○曆○朝○  
 寶○  
 曆○正○歲○靈○  
 新○旦○朝○辰○  
 拜○更○履○迎○  
 四○始○端○新○  
 方○  
 晨○賀○屠○  
 貢○賀○正○蘇○

唐の貞觀十四年景雲見、元會第一奏するものなり  
 劉宋大明五年正月元日、於て公卿殿庭に降り、右衛將軍謝莊殿を  
 晋書、禮樂志、正旦元會白獸樽を殿庭に發して、酒を飲ましむを  
 曰く、臣生る、の年正月甲子朔、四百有十五甲子なりと  
 左傳、晉城杞絳縣人年長じて子無し、これが齡を問へば答へて  
 椒、花、酒、肇、の年正月元日、於て公卿殿庭に降り、右衛將軍謝莊殿を

(一) 節序

第五章 近體類語



語類體近章五第

煙二鳴鳥落斗卯雪美綠春芳  
雨十頭啼花柄色融人楊社事  
空四春花芳東天銀天煙  
濛番水落草

三柳草養日

春春千九落月絮芋花如  
寒波紅十花三飛綿天年

料激萬春飛  
峭灩紫光絮

燕雨草月  
子廉如籠  
風纖茵花

春春雙遠落  
天風柑山花  
杏駘斗如流  
靄蕩酒睡水

一少柳燒  
雁女三痕  
歸風眠青

花  
信

風  
暖

芳  
甸

迎  
暖

遲  
日

成大詩作

踏柳早紫禊社煙春迎香春春  
青眠春筍節雨濃分春風山晴

青坐孟社永細流桐春聽春春  
帝花春燕日雨鶯華來鶯雲風

駘對立雁啓蝶社祈清尋陽東  
蕩花春歸蟄舞日蠶明花和風

煙九晚雪水試社重新垂煙柔  
景春春消暖馬鼓三春楊花風  
三三日月

芳艷暮養採淑撲韶新飛群條  
草陽春花艾景蝶華陽花芳風

芳冶草落拾麗暖芳青東芳和  
信春肥花翠景日華陽皇菲風

第五近體類語

聞神 金燈 口佛 說火 空輪 中張 似刻 散像 玉毫 光	上元郎 願與 梅 花 俱 自 新	己春 應度 猶春 及歸 無限 願與 梅 花 俱 自 新	御文 含武 元千 殿官 歲仗 丹兵 鳳門 開萬 白方 日同 明軌	元日仗 白櫻 鷗雲 春梨 水雪	唐張 祜 上皇 一	唐盧 同 從 令 克	唐崔 液 影 裡 如	唐 七 寶 裝	今朝當社日	宋戴復古

成大詩作

晴春魚杏峽百鶯春紅細蘭春  
風光吹花蝶嘯梭星杏雨亭月  
蕩潑柳零深流燕的綠啼雅朦  
漾眠絮落深鶯剪際楊鵲集隴

紅芳千峰蜻東花好綠蝶淡東  
情草峯抱蜓風經鳥慘舞雲風  
綠芊靄花欸走柳嗜紅鶯微脉  
意綿靄鬚欸馬緯嗜愁歌雨脉

殘洞鶯落花黃花鶯梅綠美曲  
花庭聲紅事鳥明語花戰人水  
滿春恰浮闌遷柳綿帶紅天流  
地色恰水珊喬暗蠻雪酣氣觴

第五近體類語

風○兩○容○株○不○得○和○鶯○吹○折○數○枝○花○副○使○家○何○事○春○

春○居○雜○興○

宋○王○禹○偁○

雨○惹○春○色○輕○染○龍○池○楊○柳○煙○禁○火○前○九○重○細○

長○安○春○望○

宋○溫○庭○筠○

是○山○陰○作○序○人○

路○車○雷○晴○起○曲○江○塵○臺○英○正○約○尋○芳○會○誰○

水○還○思○舊○取○次○看○花○便○當○春○絮○雪○暖○迷○西○苑○

遠○道○今○逢○祓○禊○辰○雨○餘○風○物○一○番○新○等○閒○臨○

家○何○處○有○牧○童○遙○指○杏○花○村○

上○已○

宋○韓○琦○

作詩大成

清○明○時○節○雨○紛○紛○路○上○行○人○欲○斷○魂○借○問○酒○

清○明○

唐○杜○牧○

宮○傳○蠟○燭○不○飛○花○散○入○五○侯○家○御○柳○斜○日○暮○漢○

春○城○無○處○不○飛○花○寒○食○東○風○御○柳○斜○日○暮○漢○

唐○韓○翊○

瓜○田○好○令○人○憶○邵○平○

寒○雨○欲○晴○浴○蠶○看○社○日○改○火○待○清○明○更○喜○春○

江○南○寒○食○早○二○月○杜○鵑○鳴○日○暖○山○初○綠○

唐○陳○潤○

鬢○邊○雪○見○招○多○年○不○肯○消○重○紅○透○海○棠○嬌○自○笑○東○

今○朝○當○社○日○明○日○是○花○朝○佳○節○惟○宜○飲○

鶯海雀雪江柳煙  
暖日乳岸山色花  
初生先叢如黃宜對  
歸殘春梅有金落聯  
樹夜草發待嫩日

雲江鶯春花梨絲  
晴春啼泥柳花管  
却入過百自白醉  
戀舊落草無雪春  
山年花生私香風

唐李  
錢王同同杜同  
起灣甫白

理雲帆別舊磯  
水十日不出花亦  
上已雨中重過煙  
雨樓清王又曾  
作春寒暗中似  
却被垂楊冷眼看

老子水多外  
綠難茅檐竹裡屏  
陰數櫓竹裡屏  
似水貼地楊  
送春歸花閒  
弱窗更人靜  
何飛試單衣  
尚著白如年  
壘鹽累娛我  
又我梅

誰草無客  
來年愁  
往風少擬  
問力樂向  
花颺聽鶯  
枝颺聽鶯  
緩墮空有  
絲有故到  
辟園愁翻  
歷思倍舊  
溝南日光  
酒家晶晶  
路晶晶走  
共薰已

人金  
眠爐  
不香  
得燼  
漏夜  
月聲  
移殘  
花影  
上剪  
欄輕  
干風  
陣陣  
寒寒  
春色  
惱

語類體近章五第

【夏】

紅○兩○稍○金○夜○九○草○  
 杏○岸○聞○地○聞○門○色○  
 苦○溽○松○槐○朱○  
 熱○暑○花○風○明○  
 一○晚○決○夜○歸○寒○引○  
 枝○風○決○寒○雁○食○開○  
 爛○酷○三○蕉○驕○  
 春○黃○流○消○生○多○盤○  
 石○暑○庚○衣○炎○  
 店○鳥○水○美○鄉○遊○馬○  
 雨○樹○谷○酒○思○騎○地○  
 竹○午○亢○分○驕○  
 醉○熱○陽○秧○陽○  
 玉○一○盡○玉○病○三○簫○  
 簫○陂○放○人○入○月○聲○  
 扇○畏○孟○薰○梅○  
 三○春○青○春○新○春○催○  
 市○日○夏○風○霖○  
 疊○水○青○困○年○陰○暖○  
 夜○白○沒○倚○感○正○賣○  
 樓○鷗○燒○東○物○養○餉○  
 暑○盾○夏○錢○風○  
 煙○天○痕○風○華○花○天○  
 清○明  
 明○高○蘇○曾○同○歐○宋  
 嚴○遂  
 遂  
 五○五  
 日○日  
 成○啓○軾○鞏○修○祈  
 弔○煮○晚○端○鳴○  
 屈○繭○夏○陽○嫺○

成大詩作

濃○一○華○映○花○雪○濃○流○水○錦○樓○山○  
 吐○院○堂○階○暖○暗○陰○水○生○幃○臺○川○  
 襪○有○翠○碧○能○梨○花○伴○挑○人○藏○終○  
 芳○花○幕○草○醺○千○照○遲○菜○未○綠○不○  
 薰○春○春○來○眼○樹○野○日○渚○起○柳○改○  
 巘○畫○風○春○  
 嶼○永○至○色○  
 山○煙○寒○野○煙○珠○籬○桃○  
 濕○八○繡○隔○濃○迷○食○花○濕○樹○落○李○  
 飛○方○閣○葉○欲○柳○柳○留○落○鵲○露○自○  
 雙○無○金○黄○染○一○圍○晚○梅○先○紅○無○  
 翠○事○屏○鵬○衣○川○村○春○村○驚○桃○言○  
 破○詔○曙○送○  
 漣○書○色○好○  
 漪○稀○開○音○  
 楊○陸○陳○張○蘇○文○王○王○  
 宋○唐○萬○與○  
 林○李○劉○杜○里○游○義○未○軾○博○禹○質○  
 長○甫  
 甫○  
 甫○

第五近體類語

身○下○何○ 保○知○藥○端○  
 自○有○以○ 昌○權○且○午○ 榴○綠○棋○  
 得○清○消○ 茂○傳○臨○端 花○陰○消○  
 風○煩○ 忠○ 觴○中○ 如○幽○永○  
 難○ 暑○ 貞○向○ 夏○午 火○草○日○  
 更○熱○ 如○水○事○  
 與○散○端○ 不○覺○古○晴○ 滿○調○  
 人○由○居○ 替○蘆○人○清○ 地○水○  
 同○心○一○ 香○留○日○ 槐○雪○  
 靜○院○ 貽○ 跡○復○ 花○藕○  
 中○ 厥○億○ 長○  
 涼○ 後○兆○年○  
 生○眼○ 唐 昆○間○深○鹽○ 唐 蛙○紅○  
 為○前○ 芳○歸○縷○梅○ 聲○藥○  
 室○無○ 壽○續○已○ 閣○翻○  
 空○長○ 長○佐○ 閣○階○  
 物○ 群○ 鼎○  
 此○ 公○當○  
 時○窓○ 共○軒○麴○

作詩大成

浮○簞○蝴○午○豆○夏○斗○草○朱○竹○麥○午○  
 瓜○紋○蝶○眠○苗○簞○指○木○夏○寒○秋○日○  
 沈○如○老○醒○肥○清○南○榮○ 上同  
 李○水○ 煩○三○熟○角○  
 盧○望○著○午○櫻○畏○熱○伏○梅○黍○  
 流○茂○橘○雲○單○夢○筍○日○ 上同  
 金○樹○熟○霓○衣○回○厨○長○消○兢○標○夏○  
 燦○連○ 暑○渡○梅○至○  
 石○陰○ 北○綠○墮○竹○解○ 五五月  
 窓○陰○甑○有○慍○銷○殘○斷○伏○  
 眠○涼○中○孫○風○夏○夏○梅○日○  
 嶺○薰○ 芭○煮○芍○解○火○ 梅○納○賜○  
 雲○風○ 蕉○新○樂○籜○傘○ 雨○涼○肉○  
 烘○解○ 展○茶○開○風○張○ 上同  
 日○慍○ 初○浣○九○  
 夏○花○夏○  
 五四月

第五近體類語

綠綠燕新草竹卷四筍雷竹  
 分荷低溜徑色簾山抽霆深  
 田雨去迸迷水通嵐過空留對  
 水洗地涼深千燕色舊霹客聯  
 新藏不侵綠頃子重竹霹處  
 栽龜盈靜  
 稻葉尺語  
 池松織五梅雲荷  
 蓮聲竹月落雨淨  
 浴風落水立竟納  
 膩四雞聲閑虛涼  
 紅檐孫寒枝無時  
 上殘書宋林  
 金宇文虛中  
 宋陳與義  
 白居易說  
 唐杜甫  
 節基游道

作詩大成

在此南樓上  
 炎蒸不可當  
 不借人開門  
 一滴涼月蒼蒼  
 天河只  
 笛携參差來起  
 柳外涼池蓮  
 自在香  
 倚胡床  
 月明船  
 風石生梁  
 麥氣屋有綠  
 陰幽草勝花  
 時  
 度兩陂  
 晴日暖  
 地別院  
 日卓午  
 夢覺流鶯  
 一聲  
 透簾明  
 樹陰滿  
 夏意  
 宋蘇舜欽  
 宋王安石  
 宋秦觀  
 明宗泐

語類體近章五第

宋○白○白○松○凄○月○白○紅○紅○秋○搗○火○  
 玉○蘋○衣○風○風○色○雲○蓼○葉○雨○衣○流○  
 悲○風○送○蘿○苦○如○明○  
 秋○起○酒○月○雨○霜○月○山○河○秋○曝○授○  
 瘦○淡○霽○書○衣○  
 碧○雲○空○鳥○夜○荷○白○  
 鱸○物○山○鵲○雨○雨○蘆○征○芳○砧○白○肅○  
 紫○凄○獨○南○參○荻○紅○雁○菊○杵○蘋○霜○  
 蟹○涼○夜○飛○禪○風○蓼○  
 搖○籬○流○草○柳○  
 落○菊○火○黃○疎○  
 敗○王○落○山○江○梧○蟲○  
 荷○粲○木○骨○風○桐○聲○殘○松○秋○白○沉○  
 殘○登○蕭○崢○山○一○雨○柳○菊○氣○雲○寥○  
 柳○樓○蕭○嶸○月○葉○注○  
 楓○黃○秋○素○  
 逕○葉○律○商○

成大詩作

【秋】

凜○促○落○露○秋○空○黃○寒○西○新○  
 秋○織○葉○冷○陽○山○花○蛸○風○秋○  
 敗○乞○蟋○顛○秋○登○殘○秋○秋○荷○  
 荷○巧○蟀○氣○分○高○蛩○聲○光○枯○  
 夕七 九九月  
 鵲○解○白○冷○窮○賓○吟○殘○高○殘○  
 橋○夏○露○雨○秋○鴻○蛩○蚊○秋○荷○  
 元中 荷○涼○  
 嫩○剝○水○白○迎○殘○蟹○重○悲○秋○  
 涼○棗○落○帝○寒○蟬○蛩○陽○秋○風○  
 九九月  
 晚○詠○石○肅○金○秋○砧○丹○中○金○  
 秋○扇○出○殺○天○成○聲○楓○元○風○  
 七日月  
 九○素○素○落○伏○秋○蘆○紅○蟲○商○  
 秋○秋○節○木○火○霖○花○楓○聲○颺○  
 竹○黑○  
 陰○驚○  
 入○燕○  
 寺○子○  
 綠○翻○  
 無○階○  
 暑○影○  
 葉○受○  
 繞○槐○  
 門○花○  
 香○灑○  
 勝○地○  
 花○風○  
 清○  
 厲○  
 鵲



第五近體類語

昨朝一葉見秋生。今日千巖萬壑清。欲借西	去無塵土。秋生涼。杜若洲。閑花。月波。微漾。綠溪流。茅檐歸。	弟獨在異鄉。為異客。每逢佳節。倍思親。遙知兄	鶴自古逢秋悲寂寥。我言秋日勝春朝。晴空一	板橋霜。落楓寒。
---------------------	--------------------------------	------------------------	----------------------	----------

成大詩作

菊大絡白雁蟋梧西兼金張落  
 花火緯蘋陣蟀桐風霞風翰楓  
 節流雋洲高鳴老急水玉蓴江  
 冷露鱸冷  
 紅賦一河落山芭雁  
 蓼重葉漢葉山蕉橫秋蟋青亂  
 渚陽飄淡聲瘦破塞風蟀女蛩  
 蕭宵降如  
 白登斗賦蟲客黃雁瑟征霜雨  
 雁高柄秋聲心花帶  
 飛會西聲苦驚酒秋  
 燕萬白江  
 雁插金燒落桂蘆橘去家露涵  
 飛菜氣紅木香花柚鴻砧為雁  
 高莫寒葉秋飄雪寒來杵霜影

蘭酒洲曉秋落棗菊  
衰醒白鷺水雁熟散  
花秋蘆棲翻迷從金對  
始簞花危荷沙人風聯  
白冷吐石影渚打起

荷風園秋清飢葵荷  
破急紅萍霜鳥荒疎  
葉夏柿滿脆噪欲玉  
猶衣葉敗柳野自露  
青輕稀船枝田鋤圓

唐  
白元張鄭錢孟杜太  
居 均巢起然甫宗

蘋鶴山  
風堪入  
起昨夜畫  
思吹  
悠蕭蕭  
月閑  
滿門  
樓逕  
自  
鴻宜  
雁秋  
欲來當  
江時  
欲載  
冷酒  
人  
白如

槿花委露渚蓮愁  
池影櫛十  
滴金分  
露巖瑣秋秋  
寫桂碎色  
詩花滿軒  
狂稠擣霜窓  
不斷砧  
香杵景物  
坐丁凄  
到當清  
更井氣涼  
吟梧葉  
興脫篩  
動無月  
硯多簾  
向影夜  
誰老雨  
說蜻洗河漢  
時靜詩懷  
泥引閑覺有靈  
漆園經機發  
涼吹籬聲新蟋蟀  
道遙草  
風蘇病骨  
暫來石上聽松聲  
新秋雨後  
唐僧齊已

無復紅粧盪小舟  
明居節  
濃淡雲

宋戴復古

語類體近章五第

落黃檣霜芙蓉風燕食一潮霜葦  
木花帆林蓉翻知隨蓬生雁折  
千半落落葉荷社鳴秋水一雁  
山老處後上葉日磬雨國聲聲  
天清遠山三一辭巢睡兼語苦  
遠霜鄉爭更向巢鳥初葭  
大後思出雨白去下起響

澄白砧野蟋雨菊行半兩江多  
江鳥杵菊蟀濕為踏硯過兩魚  
一孤動開聲蓼重空冷山岸氣  
道飛時時中花陽林雲城秋腥  
月落歸酒一千冒落吟橘

分照客正點穗雨葉未柚  
明前情濃燈紅開聲成疎

黃賀梅歐李溫皇王殷許  
庭堯陽昌庭甫文  
堅鑄臣修符筠冉維注渾

成大詩作

思野清天潛魚霧白庭碧江夜  
婦靜風寒魚龍昏煙風雲村涼  
樓雲千一聚潛臨連吹蕭平金  
頭依里雁沙凍水海故寺見氣  
月樹夢叫窟水寺戍葉霧寺應

征天明夜墜蟋風紅階紅山天  
人寒月半鳥蟀勁葉露樹郭靜  
馬雁一幾隕有欲下淨謝遠火  
上聚聲人霜哀霜淮寒村聞星  
霜沙砧聞林音天村莎秋砧流

明 宋  
章何葛楊陳劉余崔雍司許劉  
美景長萬師 空 禹  
中明庚里道做靖峒陶圖渾錫

語類體近章五第

【天長節】

一·漢·允·天·九·福·聖·鴻·華·草·髮·國·白·衰·去·  
 人·代·文·縱·重·暇·誕·儀·封·衰·照·正·  
 有·賜·允·如·來·當·  
 慶·酺·武·椿·不·穆·北·佳·嵩·征·秋·秋·  
 算·騫·穆·闕·辰·呼·髮·水·盡·  
 萬·堯·五·短·碧·後·  
 壽·天·鱗·華·壽·睿·紫·靈·歡·  
 無·舜·七·祝·康·智·極·辰·呼·黃·愁·登·  
 疆·日·鳳·沙·心·樓·  
 干·七·閱·寶·楓·南·積·敲·多·  
 丹·堯·周·羽·騶·武·算·宸·山·與·破·在·  
 楓·殿·人·陣·晚·日·  
 紫·舜·合·金·衰·擊·萬·仙·無·雲·鐘·斜·  
 菊·廊·宴·鏡·龍·壤·壽·齡·疆·平·清·時·  
 清·  
 變·銅·聖·虎·千·無·嚴·厲·徐·  
 輅·虎·德·拜·秋·窮·遂·  
 成·鶻·燭·

成大詩作

道·萬·蓬·鴻·夜·梧·庭·宋·老·水·九·秋·  
 上·古·鬢·雁·永·葉·樹·玉·樹·落·日·色·  
 霜·乾·轉·信·星·庭·露·有·挾·痕·清·入·  
 寒·坤·添·從·河·除·滋·文·霜·留·樽·林·  
 逢·此·今·天·低·秋·花·悲·鳴·紅·欺·紅·  
 白·江·日·上·半·漸·氣·落·宰·蓼·白·黯·  
 雁·水·白·過·樹·老·濕·木·宰·節·髮·淡·  
 馬·百·菊·山·天·豆·井·陶·寒·雨·十·日·  
 前·年·花·河·清·花·梧·潛·花·來·年·光·  
 木·風·猶·影·猿·籬·風·無·垂·聲·為·穿·  
 落·日·似·在·鶴·落·老·酒·露·滿·客·竹·  
 見·幾·去·月·響·晚·葉·對·落·綠·負·翠·  
 黃·重·年·中·空·初·聲·黃·蓼·蒲·黃·玲·  
 河·陽·黃·看·山·晴·乾·花·蓼·叢·花·璫·  
 明·元·  
 袁·李·魯·張·劉·周·黃·陳·韓·陸·陳·蘇·  
 景·東·與·師·舜·  
 休·陽·淵·昱·基·權·庚·義·駒·假·道·飲·

語類體近章五第

【冬】

梅○橙○窮○雪○擁○小○臘○寒○奇○窮○三○雲○  
 知○黃○節○車○爐○春○月○風○寒○冬○冬○霞○  
 春○橘○  
 近○綠○ 冬○互○納○歲○寒○寒○冬○三○  
 日○寒○禾○晏○麟○流○蔬○寒○衣○  
 冠○  
 松○水○ 冬○朔○避○至○凍○寒○冬○開○肅○  
 耐○落○ 至○風○寒○日○日○山○烘○冬○  
 歲○冰○ 黃○  
 寒○凝○ 南○歲○杪○水○凜○寒○冬○初○花○  
 木○衾○ 至○寒○冬○涸○烈○窓○山○冬○節○  
 葉○裯○ 冰○負○酷○霰○歲○寒○高○殘○楓○  
 紛○潑○ 柱○喧○寒○集○晚○禽○寒○冬○菊○  
 紛○水○ 麗○  
 鞞○硯○九○折○噓○寒○嚴○隆○  
 疥○冰○冬○膠○背○柯○寒○冬○

成大詩作

瑤○駕○八○瑞○九○旌○錦○千○瑞○上○風○日○  
 池○六○千○雲○重○旗○繡○官○氣○苑○不○月○  
 宴○龍○春○多○城○日○山○拜○朝○黃○鳴○光○  
 闕○暖○河○舞○浮○花○條○華○  
 千○萬○萬○九○  
 秋○國○斯○重○億○升○紅○億○祥○天○萬○天○  
 節○朝○年○深○萬○平○旗○兆○雲○杯○國○長○  
 斯○有○映○歡○鑿○慶○衣○地○  
 過○閭○祝○玉○年○象○日○呼○黷○壽○冠○久○  
 堯○闔○南○珂○  
 舜○開○山○鳴○ 鸞○鈞○仙○簫○聖○劍○鸞○  
 鳳○天○仗○鼓○藻○佩○鸞○  
 臨○撫○醉○聖○ 和○廣○出○洋○光○鏘○綴○  
 億○百○堯○人○ 鳴○樂○宮○洋○輝○鏗○行○  
 兆○蠻○樽○生○

第五近體類語

冬	窓	退	殘	平	有	梅	衡	遺
令	相	看	生	時	落	茅	誰	和
偷	對	短	愈	詩	晚	林	山	還
春	弄	景	好	句	香	麓	村	是
多	朱	無	營	梅	橫	樵	冬	寄
得	黃	亦	花	光	飛	期	暮	蘇
暖		自	未	絕	過	多	州	
		長	動	愛	野	獨		
		意	初	初	塘	往		
		况	冬	冬		茫		
		有	萬	宋	茶	事	宋	
		小	瓦	陸	雪	不	林	
		兒	霜	游	竹	全	道	
		同	自		低	忙	寒	
		此	楓		寒	翠	翠	
		趣	葉		翠	雙	風	
		何	欲		雙	驚	風	
		妨	欲		驚	風		

元胡乘龍  
可吟詩

江梅

成大詩作

冷	起	寒	梅	水	小	擁	一	肉	一	古
未	戴	寒	未	仙	春	爐	線	陣	線	木
梳	鳥	栗	綻	花	天	眠	長	遮	添	號
頭	紗							風	長	風
帽	帽									
早	起	霜	呵	飛	硯	曝	避			
景	寄	月	凍	霞	池	背	寒	千	長	
煙	夢	苦	筆	集	水	眠	香	山	松	
霜	得							積	點	
白		衾	池	歲	北	獸	一	雪	雪	
裘		似	凍	云	風	炭	陽			
初		鐵	合	暮	寒	紅	生	冰	梅	
寒	唐							柱	香	
鳥	白	風	衝	擁	雪	梅		雪	入	
雀	居	凜	寒	紅	意	返		車	夢	
愁	易	烈	出	爐	催	魂				
酒										
詩										
成	手									

第五近體類語

患野月樵高返寒破  
難日沒人杉照風柑  
思明棲歸殘寒疎霜  
年楓鳥白子川草落  
改葉動屋落滿木瓜

人別家非願久除夕客中憶女  
聽折絃

回首已徂年

今夜寒齋裡

何

龍江霜寒深平旭嘗  
鍾風晴日井田日稻  
惜斷凍下凍暮散雪  
歲雁葉危痕雪雞翻  
徂行飛峯生空豚匙

宋 唐  
陸闕賈僧皇同杜  
名無甫甫甫甫  
庚游氏鳥已曾甫

作詩大成

夜旅人逐今更炬守樹  
思館不五歲拘散歲都  
千寒燈獨不覺更今宵除東林阿杜信宅守歲  
里燈獨不眠已入後園梅改日催容顏暗裏廻夜去風光春  
霜鬢明朝又一轉唐高適故鄉今  
朝客心何事轉唐高適故鄉今  
又一年轉唐高適故鄉今  
唐王諶  
唐杜甫  
爛醉是生涯是頌花飛騰暮景斜誰能  
更拘束鴉四朝是飛騰暮景斜誰能  
杜信宅守歲  
唐杜甫  
樹都開遍不問南枝與北枝

【雪】

散風梁玉柳折玉寒玲天  
 花雪苑雪絮竹樹更瓏花  
 瑞如三碎不凍粉虛形瓊  
 花席白米夜雀蝶明雲塵  
 犬如銀縞玉瑞晶堆同銀  
 狂手海帶殿雪耀鹽雲沙  
 雨飛埋玉訪白皓霏瑤銀  
 凝絮徑戲戴戰潔霏臺臺  
 雪瓊琪滕素積玉斜梁瓊  
 花屑樹六雪素屑斜園田  
 灞鋪雲霏六鶴種紛鶩銀  
 橋玉結雪出壘玉紛毛龍

(二) 雪月花

薄硯半馬松倦帶白天鴉雪  
 雲水雨蹄深鵲雪菊空噪徑  
 淡破暮殘漸遠野為絕暮晴  
 日堅成雪覺枝風霜塞雲猶  
 商餘風六風翻吹翻聞歸凍  
 量滴外七聲凍旅帶邊故  
 雪瀝雪里緊影思紫雁堞  
 烟江  
 翠筆孤山雲飛入蒼葉雁晚  
 栢花梅背動鴻雲苔盡迷不  
 黃開春有還磨山因孤寒潮  
 梅凍動梅知月火雨村雨  
 默任臘三雪墮照却見下  
 綴蒙中四意孤行成夜空  
 貧茸花花銷音衣紅燈濠周  
 清 明 宋 唐  
 厲 錢 高 方 王 韓 伍 皮 劉 許 余  
 謙 日  
 鶻 益 啓 岳 琮 駒 喬 休 滄 渾



待馬度寒 謝髮萬 袁安舍  
 行嶺氣 家敢點 脩然尚  
 人二有頭先 興爭瑤 省中對雪寄元判官拾遺昆季  
 月情發侵 先臺雪 幾處散飛  
 歸濕柳女 屏 郢影來錦  
 謝莊章 清光 月帳前  
 衣臺街 旋透省 唐李商隱  
 龍裏飛 郎闌 起  
 山萬欲舞 定隨梅 今朝鶴  
 里無舞定 隨梅花  
 遠隨曹花  
 留植大

雪後書北臺壁

宋蘇軾

門寒 雪更 東梁聚不黃玉玉銀天  
 滿傳曉 郭園星夜竹樹馬盃地  
 山曉箭 履客堂城歌迷銀綺無  
 潔空清曉 暖梅豐郭頃白  
 深巷靜 寒遜年索刻龍古灞乾  
 巷靜 會白兆聲花飛木橋坤  
 積素隔 大蠶袁食姑白花背白  
 廣庭風 手葉臥聲肌皚斜十銀  
 閑驚竹 飛麪千竹斨生密樓樓  
 借問 白市聲披花

雪日暮蒼山遠。天寒白屋貧。柴門聞犬吠。風  
橋好河東。西去最銷魂。玉案尊。有黃昏。西湖尋酒伴。斷  
吟尺樓城。宿麥連雲。有幾家。老自嗟。詩力退。空  
尺樓城。宿麥連雲。有幾家。老自嗟。詩力退。空  
尺樓城。宿麥連雲。有幾家。老自嗟。詩力退。空

詠雪

清袁枚

逢雪宿芙蓉山主人

唐劉長卿

深新雪後。新昌臺上。七株松。寺後鐘。惟憶夜  
不思朱雀街東鼓。不憶青龍寺後鐘。惟憶夜  
亭臺經雨壓塵沙。春近登臨意氣加。更喜輕  
寒勒成雪。未春先放一城花。意氣加。更喜輕  
色。三千里。酒力消時正倚樓。共風流。江山一  
眼。西。湖。路。錯。認。楊。花。作。雪。飛。元方回。何人醉

第五近體類語

【月】

方人密撲山夜乘但透  
 蟾寒水圓情灑馬勢半興覺室  
 蝥蟾輪不應漁憶蹴有正衾虛  
 定笑箕從天誰須稠明  
 詹銀銀原青粘年銀過披如非  
 諸蟾盤無雲玉少作刻鶴潑月  
 我改屑樂浪曲擊水照  
 金金珠  
 盆蟾胎去板亂點柳年淪不滿  
 住藉隨袍行豐甘知空  
 金霜婦何全馬曾橫何差庭回  
 波蟾娥心歸足逐地處喜院散  
 只白散侍玉不破已是  
 流新姮問帝銀臣為堯龍堆風  
 輝蟾娥雲封盃朝虹民團鹽吹  
 清秋水同袁瞿高白方朱蘇方  
 輝蟾蟾

枚佑啓珽岳熹軾干

作詩大成

惹皎凍飛暮人暗光隨落不  
 砌潔雀花雲家度含車雁妝  
 任無爭厚如修南班翻迷空對  
 從藏餘一潑月樓女縞沙散聯  
 香處粒尺墨戶月扇帶渚粉  
 粉  
 妬  
 虛棲和春丈寒韻逐飢無  
 紫空鴉月雪室深入馬鳥樹  
 叢自點照不散北楚散噪獨  
 自作暮三成花渚王銀野飄  
 學花林更花天雲絃盃田花  
 小  
 梅元金宋唐  
 嬌張馮尤陸會杜李韓孟太  
 唐延 浩  
 杜翥登表游鞏甫嶠愈然宗  
 甫

第五近體類語

四更山吐月  
 殘夜水明樓  
 塵匣元開鏡

耿青待  
 耿天月  
 金懸月  
 波玉未  
 裏鈎出

空素望  
 瞻華江  
 鵝雖江  
 鵲可自  
 樓攬流

清倏忽  
 景不城  
 同西郭  
 游郭

挂席江上待  
 有懷

懷玉雲十  
 謝鏡母分  
 兔嫦娥  
 初竊  
 開似爛數  
 生藥  
 鏡眉銀秋  
 匣彎盤毫

水壺濯魄  
 桂素廣  
 子暈寒  
 飄低宮

作詩大成

細七三陰牛寒素上璧月盈水  
 學寶五魄渚月華弦彩姊虧輝  
 蛾合夜  
 眉成中  
 水殘素下皓菱團梅  
 鏡月蟾弦月花圓梁  
 半圓金  
 輪光波  
 眉似漱  
 月扇澗  
 銀丹滿廬桂玉殘孤  
 界桂輪樓影兔蟾輪  
 紈水廣映玉白初中  
 素魄寒階盤兔三秋  
 蟾金明玉桂破月清  
 影餅月鈎輪鏡魄光